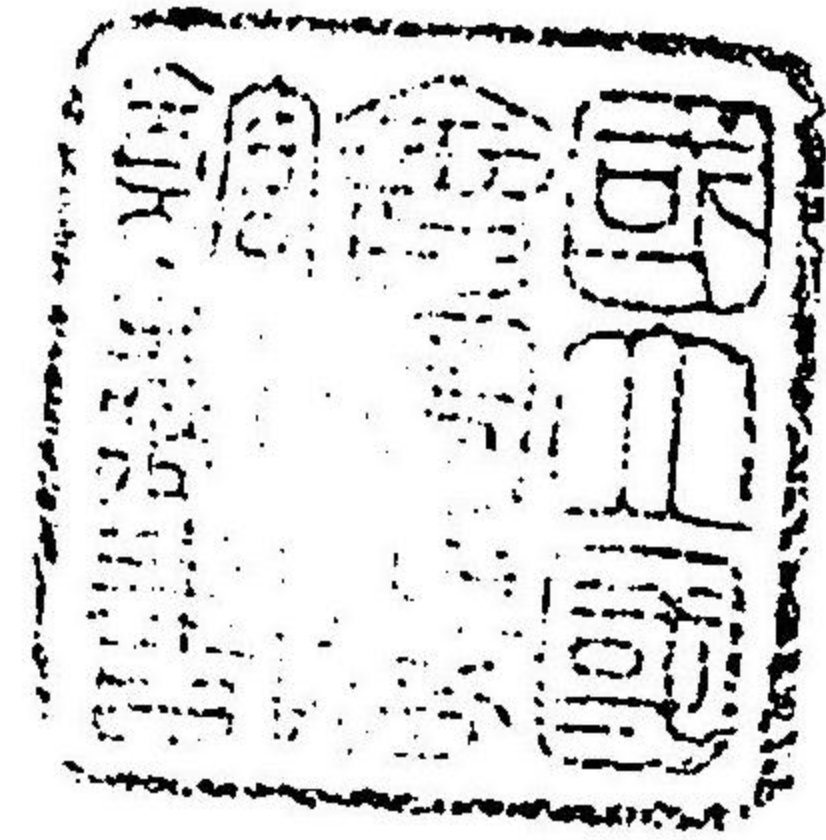


山齋集

919.5 Ka323.0 Y

~~919.5  
Ka323.5  
Y~~

911.168  
Ka323.5  
Y



漢書



225482

張華



~~Y. 2. P. 1 P~~  
~~Ka. 35~~  
~~F~~

911188  
Ka. 35  
F



225-111

明治四十二年秋九月

三位傳壽原之序



序

皇國の古典として、最もたふとむべきは、古事記と萬葉集との二つにして、この二つの書よ、世界文學の寶とも稱すべし。これが註釋とて、傳と古義との、近き世に成り出でたるは、國つ學の双壁として、實にぞ、皇國人の誇にはありける。おほよそ學問の道は深くして、人の齡は限あり、其志を確に定めて、他し事に心を傾けず、一すぢに、いそしみつとむるに非ずば、いかでか、その大成を期せんや。古事記傳は、鈴屋翁が三十の頃、思ひ立たれて身まかり給ふまで、ひたすらその完成につとめ給ひつ、其外の語學、文學何くれの書どもは、皆この大註釋の副産物として、あらはれ出でしなりけり。古義軒の翁の、萬葉註釋に志されしも、年尙若かりし程にて、七十に近き齡まで、畢生の心をこめて、いそしみつとめ給へる鈴屋

翁の苦心と、よく相似たりといふべし。傳の全部上木せられしは、文政五年にて、翁の死後二十二年の後なり。古義の宮内省の仰せにて、開版せられしは、明治十二年にて、同じく著者の歿後、二十二年目に當れるも、奇しき因縁とぞいふべき。鈴屋翁の頃は、古學の道も尙開けざることも多かりけれど、伊勢尾張は早くより學問の榮えしところ、近畿もまぢかくて、研究の便宜も尠なからざりけむを、古義軒の翁や、僻遠の地に生れて、一たびも郷土を離れず、洗ふが如き貧しさの中にて、かの大著作をなし終へられし精力熱心、今の世の人のかけても及ぶべき事かは。齋藤拙堂は、菅公書齋の記を讀みて、知古人學問之勤といへり、學問の道よろづに開けて、何事も満ち足らひぬる、今の御世に生れ逢ひて、一つの事をだになし終へず、二人の大人の大家を仰ぎまつる我等の身こそ、げに面伏にも口惜しかりけれ。古義の翁は、平生書物を大切にせ

られ、一たびも疊の上におくことなく、門人の來りて机の足らざるときは、膳三方などを出して、其上に載せしめられきとぞ、學問を貴ぶこの心懸はた、今の世の人の、よき教訓にあらずや。翁の著書、古義の外、南京遺響、土佐日記地理弁等は、已に刊行せられしが、その外の隨筆、歌集など例の副産物は、いとく多きを、この度、山本修三ぬし、次々に世に出さんとて、まづ山齋集數卷を刷卷にして、余に一言を添へよとあり、後學の余等、翁の家集の發端を汚さんこと、はちがましく憚あれども、翁の遺著の世に出づるうれしさにつけて、翁の教訓を長へに忘れじとてなん。

明治四十一年秋

芳賀矢一しるす

## 序

萬葉集の研究は、古くは源順に始まり、仙覺律師を経て、契沖阿闍梨、賀茂眞淵翁にいたりぬ。而して、それを大成せし學者として、予の最も尊敬するものを、鹿持雅澄翁とす。つらくおもふに、縣居翁、池庵大人に見るが如き卓拔の見識は、此翁の無きところなりといへども、その謹嚴精細なる學風は、鈴屋翁、伴大人と並稱するに堪へたり。翁既に、その大著萬葉集古義あり。又餘力を、永言格、雅言成瀬、鍼囊、舒言三轉例等の、文法修辭歌格に關する著書に發揮す。その後學を裨益するもの多しといふべし。然るを、かくの如き功勞ある翁にして、生前不遇の歲月をおくりて、その名世に知らるゝ事なく、彼の縣居翁、鈴屋翁等の、一世の師として重んぜられしと、全く其趣を異にせるは、豈歎すべきにあらずや。われ等後生、翁

が貧苦の中にありて、不如意の生活をおくりつゝ、さらでだに参考すべき圖書なども少き邊陲の地にありて、萬難を排して、勤勉の功を積み、つひに能くかゝる不朽の事業を學界にのこしゝを思ひ來れば、争でかは感激せざらむ。而してわれ等は、翁の此の如き努力をおもふ毎に、更に一事の遺るべからざるあるを感ず。そは翁をたすけて、よくその素志をとげしめし福岡孝則氏の事なり。福岡氏は當時高知藩の家老たりき。その鹿持翁に於けるは、猶西山公の契冲阿闍梨に於ける、悠然公の縣居翁に於けるとひとしく、文藝史上最も欽仰すべきものなり。

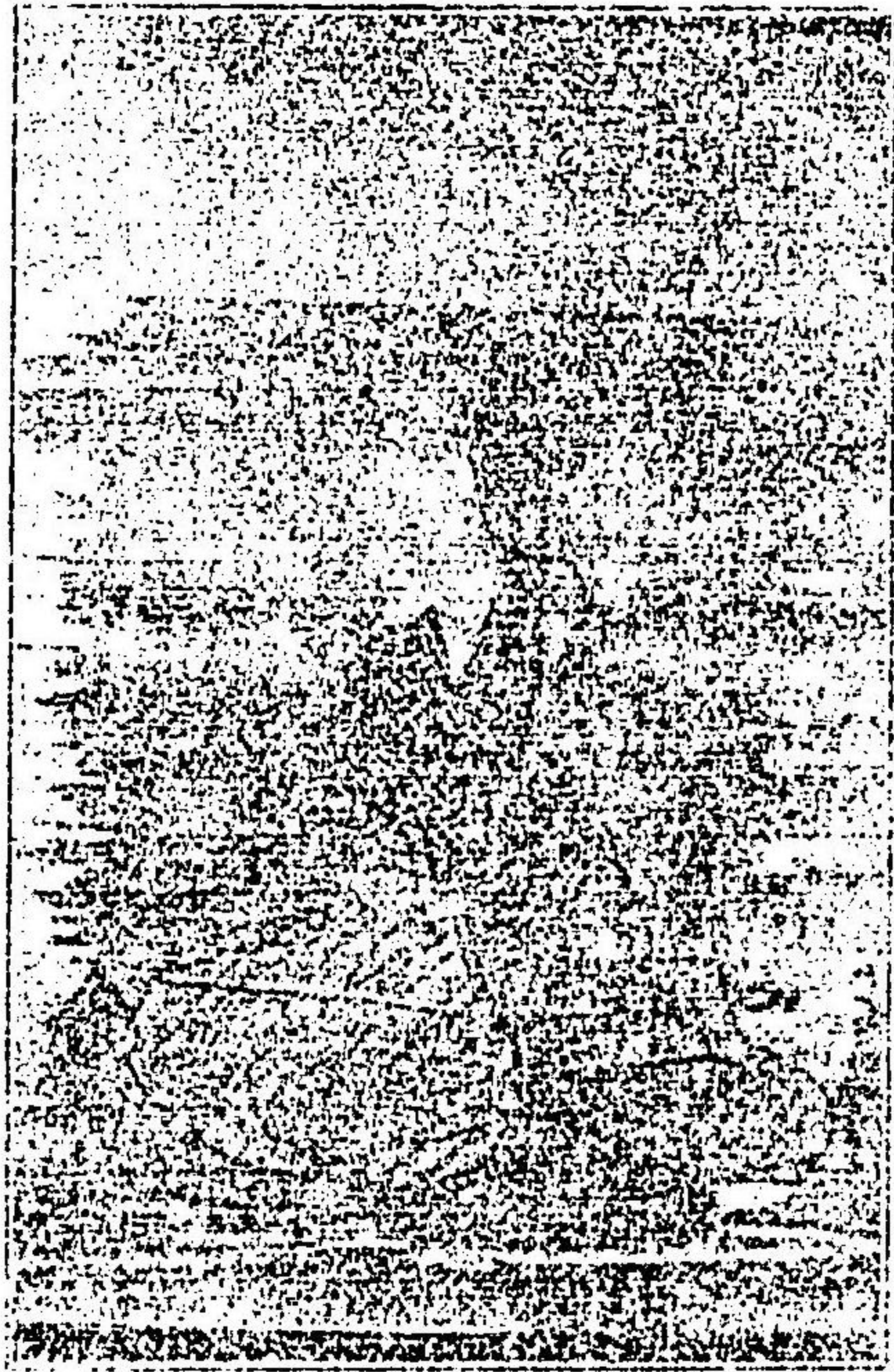
こゝに山本氏、翁の家集山齋集を土佐にもとめ得、それを刊行して、同好の士にわかたむとす。翁はもとより、學者にして歌人にあらずれども、その長歌に、短歌に、よく萬葉を學びて、高古の調あるを見れば、亦以て翁の面目を窺ふに足りなむ。

山本氏の訪ひ來て、序をもとめらるゝや、初めおもへらく、後學予の如きもの、その任にあらずと。然れども翻りておもふに、多年心を和歌の研究にひそめて、翁の學徳を慕へること、予決して人後に落ちず。かつ、嘗て編せしところの續歌學全書には、夙く翁の長歌集の一部分を收めしことあり、必ずしも因縁なきにあらじと、遂に一言を卷首にしるしそへぬ。

明治四十一年秋

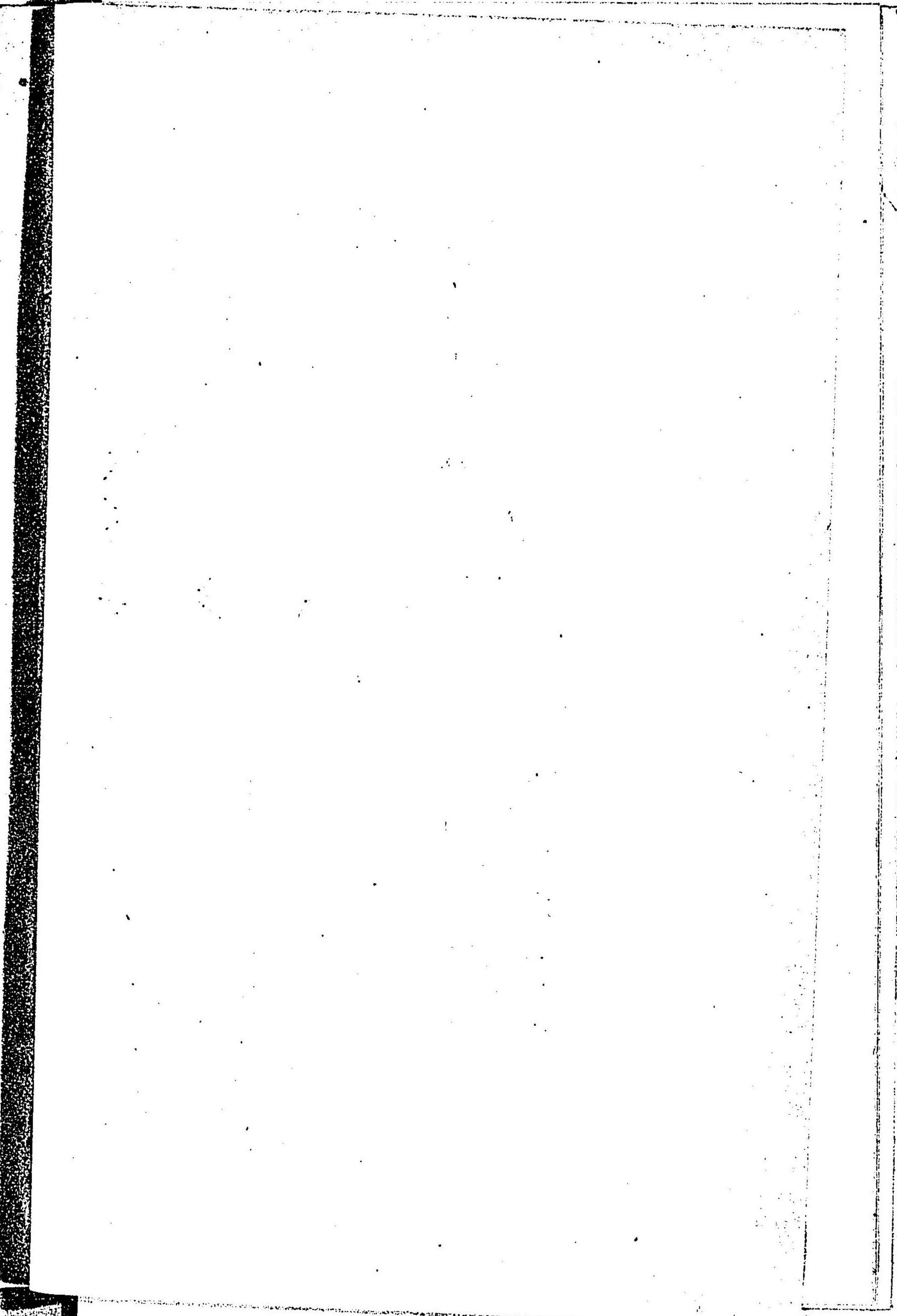
佐佐木信綱

Vertical column of text on the left side of the page, likely bleed-through from the reverse side.



此圖為... (Caption text, partially illegible)

Vertical column of text on the right side of the page, likely bleed-through from the reverse side.

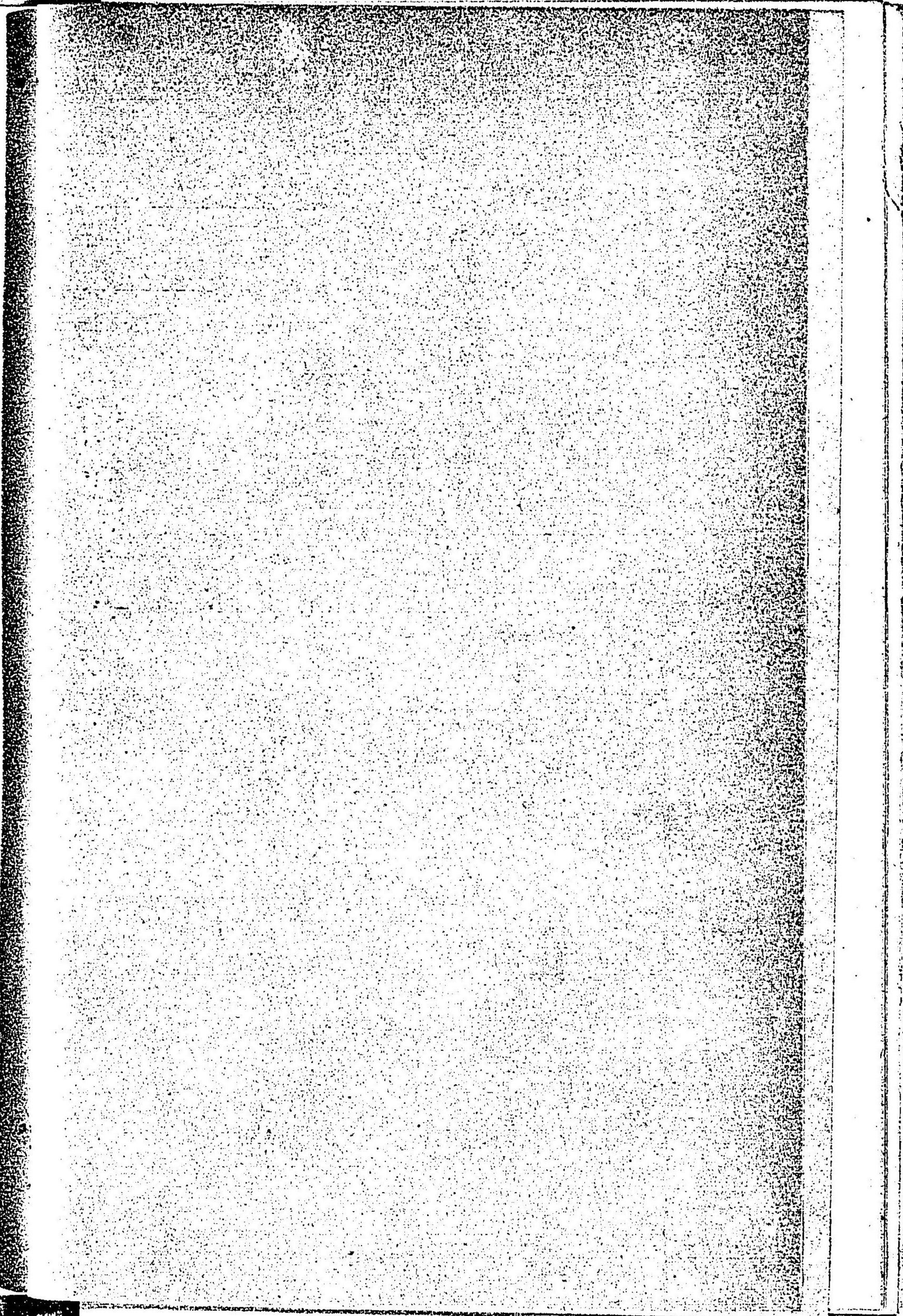






鹿持雅澄翁肖像及筆蹟

鹿持雅澄翁の肖像及び筆蹟



萬葉集古義附錄品物解卷之二

萬葉集古義附錄 品物解卷之二

草類下

土左 藤原雅澄撰

水葱

卷十六丁十八 醬酢尔蒜都伎合而鞠願吾尔勿所見水葱

乃者物 和名抄云唐韻云穀水菜可食也楊氏漢語抄云

水葱奈木字鏡云是穀二字奈支下ア小契冲云此水葱ハ

ハ又ノ水菜ニテ花元ウツレキ物ト見ユクハ延喜式

ニハ供奉ニテ奉ルト見ユクハ延喜式供奉雜米水葱四

把准田外五今今田々中ニアトテ去民ノキトイフモ

和名本草ニ解未定  
延喜式  
和名抄  
唐韻  
楊氏漢語抄  
水菜  
花元  
ウツレキ  
物ト見ユク  
ハ延喜式  
供奉雜米  
水葱四

山藍 卷九十九 二級照云 山藍用摺衣服而 繼殿寮式ニ新嘗  
 祭小奇諸司青指布衫三百十二領 紐料四丈 賞布六端  
 一丈二尺 山藍廿四箇半云 新古今集雜下臨時祭ノ  
 舞人ニテ諸共ニ侍ケルヲトモニ四位ニテ後祭ノ日ツ  
 カハニケル實方朝臣衣手ノ山井ノ水ニ影見エシ猶ツ  
 ノカミノ春ソ德ニテ返シ藤原通信朝臣ニシノ山  
 井ノ衣無リセハワスラハ身ト成テ為ナリトナリ  
 ヤマノチハ山橋 夜麻多知波奈  
 卷四十二 足引之山橋乃色丹出而語言絶而相事已停有

鹿持雅澄翁小傳

翁姓は藤原名は雅澄初俗稱を源太と云ひ後藤太と改む古義軒或は古義居士と號し  
 又山齋醜翁等の別號あり。  
 其先は權中納言飛鳥井雅康卿の孫少將雅量卿に出づ。足利氏の末公卿亂を四方に  
 避くるや一條氏亦逃れて土佐に入り國司となる。雅量卿乃一條氏に寄りて同國幡  
 多郡入野郷鹿持城に居る。山内侯入國するに及び孫雅春之に仕へて初めて鹿持氏  
 を稱し祿二百石を食む。雅春の孫安治天和二年宗家より出で徒士柳村久兵衛の跡  
 目を買受けて柳村氏を稱し爾來世々土佐郡福井村に住す。安治の孫を惟則通稱を  
 財平と云ふ翁は則其長子にして寛政三年四月廿七日福井村の家に生る。初柳村氏  
 を稱し士班に列するに及で鹿持氏に改む。  
 翁少時多病にして學を好まず父母之を憂ふ年二十歳の比大に感ずる所あり始めて  
 學に志し藩士中村某に就て漢籍を受け宮地仲枝に従て國學を修む殊に力を皇朝の  
 學に致し皇道を發揮せんことを期せり。  
 或は傳ふ翁嘗て書を曝すに際り身を背き手を後にし曝す所の書中より其一を抽出

し、其中る所の書を以て、終生の志業を定めんと欲し、乃神に誓ひて暗抽せしに、契沖の代匠記を得たり。然るに翁は此書の佛典に聯説する所多きを以て、吾が神州の道に適はずと爲し、自ら誓て曰く、吾、必ず本居氏の古事記傳を凌駕するの書を作らむと、是より一意萬葉集を研鑽し、刻苦勉勵終に古義一百有餘卷を大成せりと。其解釋詳密にして議論正確、先哲の解き得ざりし所を闡明して凝滯することなし、實に契沖、宣長以後の一人と云ふべし。

初、翁の古學の研究に従ふや、居住の地僻遠にして書に乏しく、家貧にして書籍購求の資なかりしかば、僅に知人の間を漁りて耽讀するに過ぎざりしが、翁の篤學は遂に藩老福岡氏の知る所となり、特に翁の爲めに其書庫を開きて閱覽を許し、又新に購入してその研究を助く、尋いで國發教授館總裁公子大隅君に知られ、教授館寫本校正係の職を與へらる、翁深く其知遇に感じ、奮然として他日の大成を期す。蓋當時圖書を得るの便尙乏しく、珍書は皆館中に於て繕寫せしめ、以て書府に藏す、而して其校正係や職閑にして且秘庫の圖書を參考するの便ありしなり。

天保七年冬、翁四十六歳にして、妻を喪ふ、妻は勤王の志士武市半平太の叔母にして、頗る内助の功あり。是より終身復娶らず、朝夕薪水の勞皆親ら之を執る、而も父老いて

酒を嗜み、兒尙幼なり、翁具に辛酸を嘗む、古言譯通の奥書に、去年の冬、ゆくりなく妻に別れし事のかなしきはさるものにて、おほやけ事の暇には、老たる父幼き子どもを養ふことのみにかゝづらふ身となりぬるを、素より家貧くて云々、今は書見筆執ることの暇の更にあるべくもなし」と、以て其窮狀を察すべし。又、わが常に大丈夫は名をし立つべし、後の世に聞きつぐ人も、といふ古言を稱へ居りしを、ありし世に妻が聞き喜びて、夏の日の暑さもいはず、冬の夜の寒さも知らず、且夕の事とりまかなひつゝ、聊も我志の撓みなからん事を助けあへりし云々と、其生前内助の功の尋常ならざりしを見るべし。

斯くして、翁は内外非常の困難と戦ひ、苦學すること多年、終生郷關を出でず、遂に彼の大著を成せり。其堅忍耐久の力は殆想像の外に在り、門人寺田永保の問書附録參照に曰く、吾常に學ぶところの道は、海内にわたる上の事なれば、一國一郡の人に知られたりとて、いかでか其を榮とせむ云々、身の後、三百年乃至五百年をも經む中には、世上の論定まりて、吾常に書き著し、遺しおく所の道の行はれむこと無くてはあらじ」と此確信やがて此の如き絶倫の精力を翁に與へしか。古義の稿は、生を終ふるまで、日夜改削して筆を輟めず、遂には朱墨交錯、稿本爲に閱し難きに至れり、其の刻苦想ふべし。

明治の聖代に及び、子孫之を宮内省に獻せしに、十二年、特に内帑を以て上梓せしめらる。翁一布衣より起りて、其著勅判の榮を荷ふ、名百世に朽ちずと云ふべし。

翁人と爲り、恬淡にして小事に拘泥せず、頗俗氣を離る、然れども其後進を導くや、懇切を極め、門生の質義にして難解の恐あるものは、率ね筆して之に答へ、諄々として倦むを知らず、藩主屢之を賞し、或は祿を増し、或は金を賜ひ、遂に士格に列す。

斯くて其名漸く揚がるに至り、藩中の士民、其門に遊ぶ者多く、松本弘蔭、葛目弘守、宮地守遠、別府安宣、南部殿男、横山直方等、皆各名を成す。松本は古義註釋目錄を編し、葛目は古義に、宮地は品物解及品物繪圖に、別府は名所考に、南部は人物傳に、各翁を輔け、横山は自、日本紀歌註を著はせり。維新の際、國事に奔走せし志士、武市半平太、吉村寅太郎、佐々木高行伯の如きも、亦其門に出づ。次で老公及藩主の連枝等も亦其門に列するに至れり。

翁獨學研鑽、交遊多からず、されど高田與清、清水濱臣等と文書の交を結び、時々古學の質疑に應答せりと云ふ。

翁又和歌に勤能なりき、常に語りて曰く、史を識らんと欲せば、先古言を學ぶを要す、古言を學ぶには、須く古調の歌を詠す可しと。蓋平素萬葉に沈浸せるを以て、其思想、歌

調、自ら奈良朝時代に同化し、片言隻語も、自ら萬葉調を成さざるはなきなり。當時土佐國中、翁の長歌、安並雅景の短歌、池田爲夾の雅文を三絶と稱す、而かも翁の長歌は、特に其白眉にして、亦實に天下の長技なり。

翁又書を善くす、初め下元西洲に従ひて書道を學び、殊に孫過庭を喜び、孫氏著す所の書譜の諺解を作れり。

安政五年八月十九日病を以て家に終はる、年六十八、福井村に葬る。碑陰、和歌一首を刻す、

余の後生れむ人は古言の吾壘り道に草な生しそ

是れ翁の死に臨で、遺命せし所に係るといふ。其著す所

萬葉集古義	一五二	萬葉集品物解	五
萬葉集人物傳	三	萬葉集枕詞解	五
萬葉集名所考	一	萬葉集名所國分	一
古言譯通	五	雅言成濫	二
言靈徳用	一	舒言三轉例	一
用言變格例	一	結詞例	一
永言格	三	鍼箋	二

以上宮内省藏版

六

南京遺響(刊)	三
日本外史評(刊)	一
玉蜻考(刊)	一
闇夜の磔	一
へたのみるめ	若干
本霍公鳥	一
土佐日記地理辨(刊)	一
巷謠篇	一
山齋集	七
本柏末之道別	一
問審本情	一
勿憚論	一
本教蒙引	一
山口教導	一
等あり。	一

狐廟考 日本紀歌詞師説 漢字來源説 序文體要 古今集序存疑 中興鑒言諺解 答或問書 道のしるべの評 書譜諺解 古史成文僻案 古史徵神世文字論評 古今集序月夜の燈 千首の繰言

三

### 鹿持雅澄翁小傳終

### 年譜

寛政三年	一	歳	四月廿七日土佐國土佐郡福井村に生る。
享和元年	十一	歳	(此年本居宣長翁逝く。母を亡ふ。
文化二年	十五	歳	盛に萬葉調の長短歌を詠出し漸く名を知らる。
十年	二十三	歳	此頃より清水濱臣と文通す。
十二年	二十五	歳	武市半八正久の女きつ子を娶る。
文政二年	二十九	歳	長男雅賀(後雅慶と改む)生る。南京遺響成る。七月召
四年	三十一	歳	されて藩主の連枝等に國學歌學を授く。
五年	三十二	歳	訂正萬葉集(古義五十卷)成る。萬葉集枕詞解(附録玉蜻考)成る。
七年	三十四	歳	次男雅敏生る。
十年	三十七	歳	萬葉集品物解成る。
天保元年	四十	歳	三男雅愛生る。

二年	四十一歳	藩命により安藝郡羽根浦に出張す。十月祖母歿す。
三年	四十二歳	尚羽根浦に滞在す。
四年	四十三歳	古言譯通成る。安藝郡和食の官舎に寓す。
五年	四十四歳	『數年國學出精相勤候』を以て賞として米を賜はる。幡多郡各地に出張す。
七年	四十六歳	冬妻を亡ふ。
八年	四十七歳	永言格成る。
九年	四十八歳	鍼變成る。
十年	四十九歳	勿憚論成る。松本弘蔭入門す。
十二年	五十一歳	萬葉集名所考成る。
十三年	五十二歳	五月父尉平歿す。九月亡父の祿秩を繼ぐ。書譜諺解成る。
十四年	五十三歳	中興鑿言諺解及答或問書成る。
弘化元年	五十四歳	山口郷導成る。

『積年國學出精追々萬葉歌學に通じ既に數部の著述に

三年	五十六歳	及び且手弘く導方を爲す『實』として金若干を賜はる。士格に列せらる。
嘉永二年	五十九歳	本教蒙引成る。
三年	六十歳	日本外史評及狐廟考成る。
四年	六十一歳	問審本情成る。
五年	六十二歳	本柏末之道別成る。
安政五年	六十八歳	八月十九日病を以て逝く。

## 例言

一本集は鹿持雅澄翁の遺著にして、短歌三卷、長歌二卷、及文章二卷より成る。短歌及長歌五卷は文學博士狩野亨吉氏の所藏にして、文章二卷は翁の令孫飛鳥井雅古氏の所藏なり。

一卷首に載せたる翁の肖像は、翁の生前、門人宮地大重の筆に成れるものにして、飛鳥井氏に傳ふる所なり、品物解原稿及短冊は狩野博士の藏せらるゝ所なり。

一品物解の寫眞に、其紙面の甚く汚染せるが如く見ゆるは、原本古紙を用ゐたるを以て、裏面の文字が表はれたるに由れり、以て翁の苦辛の一端を察するに足らむか。

一卷尾附する所の一文は、實は翁の自撰なれども、門人寺田永保が聞書の體となしたるものなり。就て之を見るに、翁が畢生の覺悟



と、其歌道に對する見識とを窺ひ知るべきものあるを以て、飛鳥  
井氏の寄せられたるまゝ、本集の附録として收めたり。

明治四十一年秋

編者識

# 山齋集

## 目次

題辭	
序文	
肖像及筆蹟	
萬葉集古義附録原稿	
小傳	
年譜	
短歌之上	至自 八二一
短歌之中	至自 一七八〇

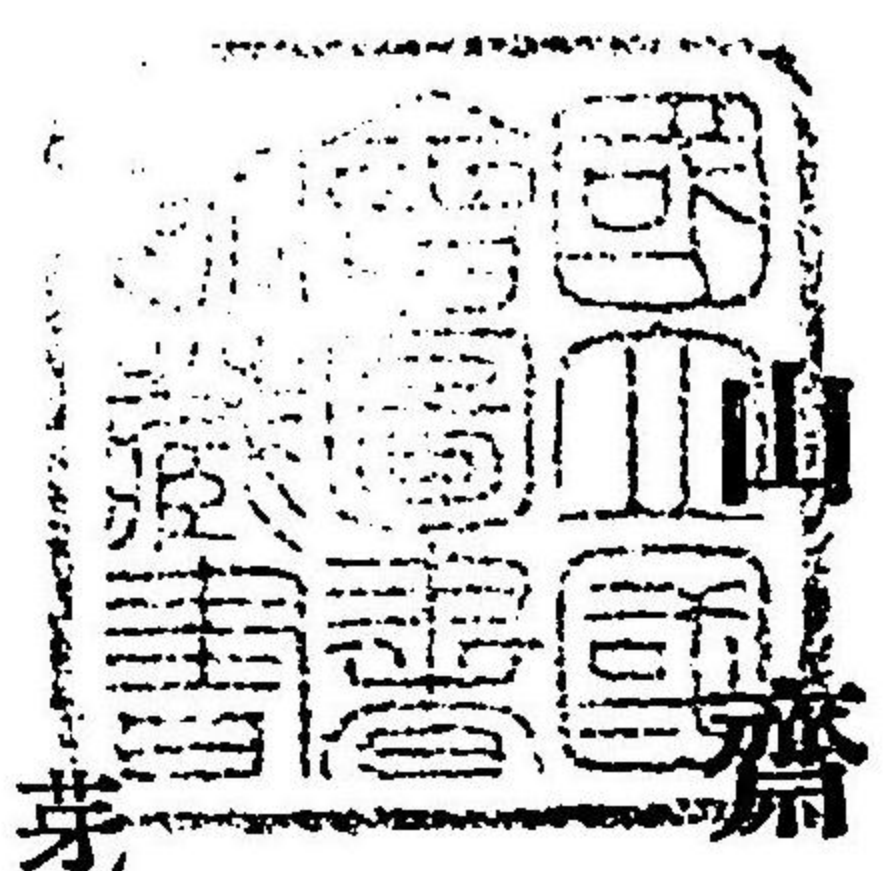
短歌之下……………自二七一

長歌之上……………自二七三

長歌之下……………自二七六

文章<sub>下上</sub>……………自三五〇

附錄……………自八一



集 短歌之上

藤原雅澄詠

左小牡鹿之妻問小野之芽花今哉將開率往而將見

雪

走出之堤爾立有槻樹之枝毛登乎々爾降有白雪

秋風

夕去者稻葉押靡白鳥之鳥羽田之面爾秋風吹

霜

吾門之一村爲酢寸押靡而朝霜甚零爾來鴨

旅

志賀山夕越來乍岡之邊之小竹葉刈敷宿不勝鴨

山時雨

四具禮零冬山道乎超來者衣手寒濕爾來鴨

會家之時賦野外雪之題

此朝開小簾卷揭而春日野爾零有白雪雖見不飽香聞

山吹

玉川爾咲而薰有山吹之花盛者雖見不飽香聞

詠花十首之中

朝不離雪跡見及高座之三笠之櫻開出爾來

名所山

朝不離雲井輕引葛城之高間之山者雖見不飽香聞

貌鳥

打靡春去來者高圓之野邊之貌鳥朝爾異鳴

梨花

打緣浪跡見迨櫻麻之麻生之浦梨花咲爾來

片枝指麻生之浦梨今毛鴨花開去濫率往而將見

茵

鶯之往來丘邊之管士花率家裏爾手折而將往

相聞

高圓之野邊之棹鹿如吾片戀耳爾音乎哉將鳴

漁舟

夕名寸爾遊鷗之羽根我崎榜回舟者漁爲良下

小松原

足曳之山之外陰之小松原茂毛行香彌年之黃土

難波潟

生駒山打越來者難波潟難波壯士之網引爲所見

名所山

樂浪之志賀津爾立而見渡者鷺之高嶺爾雲居棚曳

名所川

音羽山夕越來者逢坂之關之小川爾佐射禮浪立

名所橋

白鳥之飛幡之里乎立出而氏之川橋近附去來

羽根埜

大鳥之羽根之埜在白波爾絕塔舟之泊不知毛

鑑河

狹丹頰經妹之手馴之鏡河逝瀨之浪之音之潔者

九月旬餘月光清朗之夜遙聞鶴喧作歌

月讀之光清秋夜爾雲居令響鶴曾鳴爾在

野時雨

兒等家路離之不來者武藏野之四具禮乃爾袖者不泥乎

題村上彥四郎畫

丈夫之數爾母不在奴等之手爾取爲可旗爾在勿國

雪朝贈交遊

直獨見卷者不怜赤駒之足搔乎速日來座吾背子

以加保與波那五言冠每句頭

蜻火之髣髴爾曾聞呼子鳥羽買山爾鳴渡聲

寄碇戀

大舟爾下重石之何許念沉吾情曾母

山榊

春日在三笠之山之賢木原榮毛行香神之御前爾

初春詣母墓聊述心緒

眞幸而世爾座者初春之豐之祝言相云猿乎

神祇

白眞弓押而射放八幡山嶺之木立者神佐備爾家利

古京

青丹吉寧樂之京者每見彌不樂毛寧樂之京者

落瀧津瀧之京乎今見者舊去御代之所念良久爾

夕春雨

春霞霧合夕之春雨爾垣津之梅之散香過南

馬上戀

置而來之妹毛吾乎之戀者哉此山道爾駒之爪衝

猿

奧山之嶺之左々栗毛利喫常高木之末爾猿等鳴奈利

爲賀秦泉寺村吉井九介六十算賦寄水祝之題

底清秦之泉之眞清水者誰万代之鏡爾在覽

山振

朝夕爾雖見飽八蛙鳴芳野川之山振花

魚

打靡春去來者鏡川々之瀨清見年魚兒狹走

詠花歌并序

日者有人稱山櫻之盛焉於此余奮然志遊觀矣時維暮春之初與友交臂泝久萬河流到  
役行寺村柿瀨里此地有一株櫻其樹長大枝々繁茂其花滿開美而豔也曳々如雲皎々  
如雪盈視駭矚矣爰時樹踞樹陰不知遲々春日之將沒焉聊作短詠式展拙緒云

足檜之山副照而開花之盛爾逢有今日之樂者文化七年庚午三月朔日記

以遠美那倍志五言冠每句頭

少女等之海松布刈爲跡難波瀉邊浪爾袖乎志保里兼鴨

行客舟已遠

遠江濱名之海之奧放而榜行舟之泊白鳴

戀

淺茅原曲々爾蟀蟋之音耳之所鳴妹爾不相而

野遊歌三首

文化七庚午時正膺暮春之望也櫻花盡散落山振半謝枝爰想河南藤華方發適與二三把臂臨鑑河之滸于時忽見娘子涉河水乃作歌

鑑河淺湍之浪乎脛爾上而伊渡爲子者誰思妻

遂欲探勝景泝流涉川行神田里詣觀音堂々邊樹頭有蔓藤未會開一花不憾乎猶步而至于南山下則躑躅盛開々欲燃寔堪駭矚則作歌曰

足引之山副照而管自花木丘咲去來春深見香聞

盤桓久之夕陽沒山爰則強情向歸路野徑見美女摘草花又歌曰

霞立淺茅之原爾袖垂而莖摘兒之家乎之曾念

黃昏抵家聊記

詠海

土佐海爾榜出而見者大鳥之羽根之三埼爾五百重浪依

詠里

舊去來跡常毋知久飛鳥之明日香里者人目乏毛

某年某月某日丁 寬邦院君一周御忌不堪悲傷之情拭淚作

歌

曜月之雲隱去今日毛來去吾泣淚未干爾

見戀

紅之赤裳之爲形每見彌目頰布妹爾毛有香聞

翫物華歌并序

三月下旬有客來告曰吾子無意於逍遙乎請與子俱擬賞芳菲之令節以取一日之樂不亦可乎余曰諾遂與客把臂行到鑑河之下流嘗過日連雨河水汎溢無由渡行則泝上流舟而涉著南岸閑遊至神田村土地有神祠邊樹杪有紫藤靡々亂綻又黃鳥嚶々競聲咨乎適今日遊遊勝界對此眺翫亦何幸也詎聊可不述蕪詞暢所心耶乃歌曰

藤浪之花之盛乎不飽常哉梢不去而鶯之鳴

荊蕪

霍公鳥來鳴令響吾屋前之垣津之宇萬良花咲爾來

聞霍公鳥喧作歌

霍公鳥啼聲聞者山畑之麥刈時爾成爾來霜

螢火

夕去者茅生之露原搔分而宇奈比放者螢取爾在

應 東館君命賦山月之題

仰見高坂山之彌高爾照有月之影之清也

同前賦秋月添光之題

秋夜之月之影社眞十鏡清爾耳者所見亘計禮

詠月前十首之中二首

月前鹿

照出月夜乎清見棹鹿之妻喚聲彼此所聞

月前旅

松根乎枕爾卷而久方之月見夜者家乎思曾念

冬夜問娘子道上作歌

妹許等戀乍往者夜乎深三四具禮乃爾袖者濡乍

爲賀愛宕町土居八右衛門六十齡賦春祝之題

万代之春毛經而申愛宕山峯之小松之神左振迄

櫻

且不去棚引雲常見及尾上之櫻咲爾來鳴

鶯之來鳴垣津之櫻花此春爾散卷惜毛

吾屋外之垣津之櫻風乎痛散可毛將過見人毛我母

舟

孕瀉迫門之朝霧押分而棚無小舟與爾出所見

夏戀

霍公鳥往來丘邊之夏草之思四季而戀此者鳴

鹿

秋風之寒夕乎左小男鹿之山爾毛野爾毛妻呼渡  
芽子花散相岡邊之秋風之寒夕爾左小男鹿鳴毛  
旅

泊爲室戶之浦之湖風寒此夜者家乎思曾念

懷古

高千穗之二上見者皇神之天降坐兼右所念

詠川

朝旦妹之取見鏡川又還將見清河湍矣

正月四日嗟嘆大町稻城家燒亡贈歌三首

玉牀毛庭毛垣津毛如春野燒荒而四君之家者耶

加具都知乃神之荒備波將言爲便將爲便無哉神之荒備波  
寒夜乎家副無二將明君乎思念者心神毛無

朝霞

三冬須藝春立去良之朝霞山爾毛野爾毛棚曳見者

寄鳴戀

玉津島來緣浪之數々爾子等之容儀之所念鳴

懷古

大君之宮敷坐四櫃原之雲飛山之古所念

詠舟

浦戶崎奧津白波庭吉跡八十之釣船朝開爲毛

文化午年每日詠一首歌之中八首

惜無名戀

空石花貝實無言以奧浪音爾將立吾名之惜毛



連夜待戀

烏玉之夜床片去今夜毛也吾背君乎待將明

瞿麥帶露

撫子之花之盛乎今日且見者白露甚置爾來鳴

池上蓮花

殖置之吾家之池之花蓮此朝露爾咲爾來毳

暮山鹿聲

夕不去小男鹿鳴在小藏山嶺之松風寒之有良斯

月浮流水

桂川流水尾之早瀨爾照有月之影之清左

寄月見戀

春夜之朧月夜之髣髴見之妹之咲比之忘不得津藻

水鄉寒芦

朝霜之日爾異置者三島江之玉江之芦者冬枯爾來

正月十一日會伊與木千茂家時詠梅

鶯之往來垣津之梅花千代常盤爾雖見將飽八

同時詠雪中鶯聲

搔霧之雪者降管然爲蟹木間久吉鳴鶯之聲

戀

吾妹子之待跡之聞者荒熊之住云山毛越不勝申哉

春戀

春山之嶺之櫻之花咲二咲四々爲形何時將忘

三月朔日伊與木千茂家會賦雨後柳之題

昨夜零之雨爾競而吾苑之一株柳萌始去來

深崎秋月

清照月爾競而吾舟者三埼海爾近附二家利

伊與木千茂往于江戸之時悲別作歌

吾背子之垂佩刀之手上爾毛成申鬼尾比而將往

應門人大江清男需詠酒

大名持少御神之無有世伐誰歟將釀與可美豐御酒

爲賀千屋茂樹母六十齡賦寄水祝之題

落瀧知流八信井之甘美水甘美爾令食万代及爾

伊與木千茂往于江戸之時作贈歌二首

旦霞八重山越而雖別意許波勿隔曾君

旦日照高阪山之高々爾吾待將居早歸座

堀取冬薯蕷贈大町稔城歌二首

足引之山邊野邊求往而伊許自取來四冬薯蕷葛此

愛寸君乎見卷者冬薯蕷彌常敷爾相見幕乞

稔城報贈歌二首

足引之山邊爾生冬薯蕷懸而千年乎共爾鳴見  
愛君之取來之冬薯蕷千年乎懸而雖見將飽八

賀市原氏八十算

高阪之山之盤根爾蔓都多乃又乎知還千代毛經而申

詠芳野山

淑人之吉三跡云之芳野山吉見而往名良人之爲

文化十二年乙亥八月十五日夜應 命賦田家月之題

金剛山之秋之垂瀧之入東瀧之瀧前乎見世跡月者則良之

同年九月十三日夜應 命賦湖上月之題

垂姬之浦吹風爾霧晴而布勢之水海月照爾家利

同年九月十四日夜與神山氏小谷氏吉田氏欲賞月光遊鑑河于時雲霧

辭乃即陳思作歌

月見常風流壯士之打出來夜會久方之雲吹拂鑑河風

暫時雲霧頓散月光清朗又作歌二首

鹽屋埒押照月之影乎吉潮江小田爾鶴鳴渡

鑑河與邊爾沈真白珠清爾見與月者照良斯

文化十二年乙亥九月十六日遊羽山鄉道上屬目物華之詠并與中所作

贈答之歌十八首五律五首絕十三首今除律

到高岡郡新河作歌

古之野中健男之穿設之新河水之音之潔左

到高岡里訪橘小枝不遇仍作以貽

神河之奧乎深目而吾念有君爾將逢跡名津匝曾來

到大野鄉超多能治山之時日既沒

多能治山夕越暮豆大鳥之羽山之里爾近着去來

到羽山鄉姬野村訪伊藤躬列作歌

天傳姬野之菅之懃吾念君乎今日見鶴鳴

又

足引之山毛動響二鳴川之音之清左聞之吉毛

此地有河號鳴川因作此歌詞

廿日翌朝將發歸路因此源清來相與惜別之時主人躬列作歌

白露二丹穗經姬野之秋芽之不飽毛君乎聽去之悲也

鳴川之野上之薄穗爾出而招代無今日爾毛有鴨

雅澄和歌

家爾行而吾者將偲白露二丹穗經姬野之芒秋芽

源清作歌

羽山嶺二生並立有皮爲酢寸穗爾出而招代毛無鴨

雅澄報歌

秋風之靡姬野之皮爲酢寸穗爾出而君乎偲今日彘

廿一日發躬列家之時作歌

姬野之哉初黃葉之目頰布相見君二今日哉將別

詠千鳥

吉野山押照月之影乎吉瀧津河內二乳鳥鳴成

設宴紅葉下作歌

風乎痛散敷紅葉杯二浮而飲名置哉將朽

冰

鳴鳥之遊池水磐床常冰渡而寒此夜者

朝雪

佐野岡朝立來者神前荒礪前二雪降二來

詠千鳥

鹽之山押照月之影乎吉三指出之礪二千鳥數鳴

爲賀森田彌三丞八十八齡賦寄竹祝之題

彼方之竹生之節竹幾見竹幾度千代乎將經常爲濫

賀古谷莊助眞靜母六十算

百傳八十隈山之弓弦葉之含留千代者君之任意

詠雲

古毛如此哉有兼三芳野之御舟山爾立白雲

詠霞

梓弓弓腹振立引放矢野神山霞棚曳

詠堇

思共伊射春野爾袖垂而堇採乍此日暮名

詠雉

薩人之窺久不知孀戀春野之雉彌敷鳴毛

逢

生緒爾吾氣衝之今夜谷如此不相見者明日毛將經八方

巽

吾屋外之木間飛具久駕之孀覓音之乏蚰有蚊

馬上戀

吾乘有馬打速目吾妹子之金門爾立而吾乎將待衣

杉

美酒三輪之祝之御幣取祝杉原幾代將經

霜

夜乎寒霜曾幾許置其上踐妹許往者人將知毳

大已貴神

畏哉此大御神之無有世代皇御國者成不勝申尾

梅

搔霧之薄太禮零覆沫雪乎幾許惑梅花可聞

松

大鳥之鷺尾山爾並立孀松之木之年之不知

三

幡多郡清水莊監濱田千秋革名千束之時乞誦詞於

余仍作贈歌

名爾懸而榮乎將往左濱田之千束之稻之八千代足及

二月朔日會柳井千春家之時作歌

天之岡石根割見而梅花爾保敝流屋外二吾者來來

會宮地先生家之時折梅花贈歌

引攀而手折而曾來師風流士之今日之頭插之爲爾常念而

月夜花

情具久照有月夜爾吾背兒之垣津之櫻相見鶴鴨

遊津築島見花作歌

櫻花咲之盛乎津築島繼而見爾將來彌年之黃土

文化十三年丙子三月十五日會家之時作歌二首

瀧花

君之爲名津匝渡瀧上之吉野之佐久良手折來去來

二四

落花似雪

風交落來花乎時不有雪可毛降跡念鶴鴨

八月十五日夜應 東殿君賦月契豐年之題

萬代爾如是師御見益打四搓穗立清爾照有月夜乎

九月十三日夜應 同君命賦池月之題

宮人之舟乘爲兼埴安之池浪清照月夜鴨

文化十三年丙子秋八月遊西灘道上屬目物華之詠並與中

所作之歌十九首

戶羽鄉訪某氏作歌

百重山千重山超而曜月之清屋戶爾吾者來去來

照月之由移垣根爾鳴虫之聲之友敷屋戶爾毛在毳

年魚走戶羽之小川之底清三天行月之影令宿乍

大野鄉見美女作

咲薰大野里之女郎花誰之人之頭插爾在覽

訪戶羽鄉市野里長新家作

山河之清寸里常新室之君之屋取乎戀乍叙來

於上香江浦司村岡弼直館宴時作歌十首

芽子

咲丹穗經秋之芽原分來者旅之憂毛所念無爾

薄

高崗之香江野之薄初尾花挿頭而遊今日之樂也

女郎花

女郎花咲野乎來者家妹之媚姿所思毳

海邊黃葉

押岡乎吾超來者香江之海之磯邊之木末丹穗日始在

海邊鹿

大海之礖毛動響爾依浪之音爾競有左小男鹿之聲

旅中戀

草枕旅之假寢爾相卷之妹之手本乎別香將往

濱藻

家裘爾拾而往名香江海之清濱備爾依流玉藻袁

雨中舟

香江海之礖山霧合降雨爾爭歸海人之釣舟

羈中浦

香江海之荒礖之千鳥夜降且蹶乎聞者家乎思曾念

礖貝

率兒寺鹽干爾家良思貝埼之荒礖之四自美出而將拾

還自上香江之時與彌直相別歌

貝埼之礖毛動響爾依浪之立別幕惜今日鳴

訪渚埼村發生寺僧不遇

鯨魚取渚埼海之奧真經而念而來之乎直不相鳴

訪下元真清作歌

渚埼海濱咲風之音耳聞來君乎今日見鶴鳴

文化十四年丁丑秋八月遊于幡多郡道上屬目物華之詠並

興中所作贈答之歌七十首

八月十三日夜上川口莊監安光敬八家作

秋夜之月夜乎清川口之礖打浪之由多爾所見乍

又

美奈乃川水霧合作往水之音之清屋戶爾來去來

件家西有河源出蜷川村號蜷之河仍詠此歌詞

齒花香妹之柳指小櫛之山者雖見不飽鳴

伴家少許南有山號小櫛山干時天露月光清明對此美景聊發感情作此詩云

同十四日朝將發安光氏作

河口之在衣之前二立浪之立別卷惜今日鴨

到蜷川村訪善福寺藏一宮尊良親王所翫茶碗一枝請僧

見之仍作歌

良人之御手爾馴四々玉椀乎手爾取見淚之流

同十五日夜到入田村訪大黑泰全巖

秋夜之今夜月乎目頰布吾兄君常見樂之吉毛

巖和歌

月夜見之御靈給兼秋夜之今夜來座有吾戀師君

十六日同家應需賀巖父六十齡

秋年之岡邊毛繁爾立竹之千代之榮乎見人也誰

秋年者大黑氏所居地名也

同十七日發大黑氏之時作歌

濟川渡也不得六愛寸吾兄之君爾相別而者

同日到利崗村訪莊監永野真蔭

燒刀乎利崗山者雖險直爾超來奴君爾將相為

同日夜探題所作之詩七首

女郎花

愛妹之咲比爾名副乍雖見不飽女郎花鳴

蟋蟀

秋芽之花之露落此庭爾來啼蟋蟀聞久之吉毛

葛

吾門爾延於保登禮留真葛原色付見者霜者置良四

河蝦

芳野河湍々之石床寒鴨妻喚河津左夜中爾鳴



寄山戀

吾妹子之待跡之云者石根踏百重之山毛百夜將越來

寄花戀

秋芽者早毛開香妹許爾不止將通花見香光爾

露

金門田之稻葉上爾夕去者玉跡見左右置有白露

同十八日夜同家探郡內勝地並有由緒處所作之歌一首十

入野濱

鳴鹿之聲爾副而大方之入野之濱爾四吉流白浪

喜佐瀉

行運見乍遊名唐衣打喜佐瀉爾四寸留白浪

宮路山

古乎吾問寄者宮路山立有木葉毛裏觸爾來

龍串

汐滿者荒磯之渚鳥立串之荒磯之回雖見不飽鳴

愛宕山懷古

宮柱太高敷之愛宕山幾世乎經而可神左備爾兼

有井庄司墓

神左振此之奧槲今見者有井壯士之有之世所思

有岡山

有岡之山之紅葉有通見管偲名秋立每爾

入野加茂社

劔後鞘爾入野爾宮敷而幾代經去兼加茂之大神

伊豆多神社

梓弓伊豆多能杜之神垣爾鎮齋槻木幾代經去覽

松田城蹟

遠人松田之山者舊去跡昔人之面影二所見

柏島

篠津山吾越來者柏島浪之磯觸立四寸流所見

七日島

率此間爾七日屋取而七日島在衣之回飽左右者將見

響松

打鳴也鼓之浦之近者音之響之松之左々夜々

水莖崗

淑人之舟乘爲兼水莖之崗之湊之古所思

鯨野河

大海爾居哉大魚之鯨野河逝湍之水之音之清左

呼埼

飯爾飢津餉直者不持里者无如何將超咽呼埼

井澤山

春霞井澤山爾立霧者甚勿立家毛在勿國

平野丘

はた薄尾花假ふきこよひもや平野の岡に旅寐せん吾は

伊夜濱

鳥自物浮宿爲夜者伊夜乃濱彌敷布爾家乎之曾念

大嶋

幸在常海人之釣舟連並而伊蘇波伎歸此之大島

蕨岡

吾背子跡携往而蕨岡木末之黃葉今日者將頭挿

竹島川

井澤山峯之秋霧分而來而竹島河爾近附爾來

同十九日夕雨後望松尾山作歌松尾山在眞陸代川前

遠人松尾之山爾雨晴而夕霧立去此川之濫爾

三四

又對此勝景思大黑巖作

吾背子常携來名者黃葉爲松尾山毛令見巾物尾

同廿七日與川崎氏將遊立串磯

愛君爾所引而立串之磯之白玉今日者將掇

同日訪三埧村塋屋孝達之時宴吟歌

勲爾令聞御言乎立串之海自益而深之叙思

同廿八日回家作

千尋埧三碕之海之庭淨浮出有堅魚釣舟

到清水村訪村長濱田千束

加久見瀉荒磯回從浪間守名積序吾來君之目乎欲

牧山 千束家探題作歌

荒駒乎放而飼四牧之山木立繁毛成去來鴨

比島 同上

處女等之織機物之杼鳥瀉荒磯之回今日見鶴毳

鹿 同上

宇可塋良布心毛不知射目人之立有岡爾左男鹿鳴毛

鴈 同上

筑波嶺之小峯令響尾花散師付之田居爾鴈鳴度

黃葉 同上

吾背子等黃葉挿頭而遊日者旅乎憂毛何歟將念

同九月朔日雨將發千束家之時千束作歌

木積緣浦之四吉屋者雖賤君者留禰雨障爲而

雅澄和歌

木積緣浦回之浪之並々二君之令聞者立勝目八方

同二日到櫛江濱訪龜谷益之有長歌今略之嘗益之庭上靈

芝自生因需詩詞于余即詠一首與之其歌  
生出之此之福草福之多有屋前之兆爾有來

山霧 同家探題作歌

秋霧者甚勿立曾龍田山木末之紅葉見爾來師物乎

旅戀 同上

水莖之岡之松根枕而家偈夜之寢社不取宿

同三日到中村訪三吉屋正胤之時作歌正胤

風音之遠音爾聞而高々爾吾待戀之君曾來座有

雅澄報贈歌

九月之初紅葉之目頰布君之目耳乎戀乍曾來

同時清水龍者來話之時則龍作歌

名細寸君乎待得而九月之長此夜之不飽毛有鴨

雅澄報歌

謂言之多有君爾不比者如何將開長此夜乎

同四日在中村旅館于時大黑深水過訪贈其父巖之歌二首曰

栲衾假而住宿坐置露爾鐘禮爾草之枕寒兼

將拾君之真袖之錦貝形見爾賜禮見管將偈

即雅澄和歌

草枕露爾四具禮爾迺夜者君之屋取乎懸而社偈

又贈昔日龍串所作長篇其標紙錄歌

依貝之數爾波雖不有此木積君之爲爾等拾而曾來

同夜集旅館探題作歌二首

山月

去來子等小簀卷揭與山葉爾伊左欲布月之光湯徒去

浦月

吹下比良山風爾霧晴而志賀津乃浦八月夜潔焉

同時應清水龍需題扇鶴畫

朝附日直刺方從飛翔鳴爾在鶴之文爾友四左

同五日發旅館更投蓮光寺陳前日之謝作

鵜代川水尾之不絕從今者君之面輪乎戀渡南

丁丑年八月十五日夜應 命詠關路月之題

相坂之關之山路乎越來者清々水二月者曜管

同九月十三日夜應 命詠月滿海上之題

唐之海原懸而松浦方押而照有月讀壯子

應 姬公之命詠月前鹿之題

借高之野邊副清照月二小牡鹿鳴成高圓之山

應 命詠江月之題

船泊室之江邊爾左夜更而清澈乎月照渡

應 命詠瀧月

老人之變若跡云瀧之甘美水今夜者汲名月見香光爾

應 命詠島月

月清三玉之浦回乎撈來者離小島爾浪之緣所見

寄木賀本居大平六十算

常之邊爾君者座八方奧山之賢木枝之彌榮波延爾

賀大神景井母君六十算

三苑生之湯津桂樹五百枝刺榮乎將往彌年之羽爾

贈長樂院仙英歌序

昔日與一友詣賀利辱見投轄宛如舊好時維孟夏賞心不一離落欺卯花之雪雲間傳子  
規之響於是乎情與杯共傾心與境相契嗟乎我不遊靈場何以得洗俗塵乎別後頗切懷  
企未遑致謝因聊作五七之詩以奉濱机下幸莞存

家爾來而吾者曾戀子規啼卯花之影爾宿之夜乎

文化二年二月五日後藤順平真龍往于江戸之時作贈歌

武藏野之野之曾伎不落開出來禰藤之裏葉之心安西手

庭上梅花始開之時細木瑞枝來訪仍余即攀其枝作歌

吾兄子之將頭挿爲常及今日舍而待四梅花此

下元眞清寄來書牘之時作贈欲三首

春部咲花之藤崎幸有等令聞御言乎聞之歡者

桑田山高嶺之三雪今者消去而麓之若菜將萌去鳴

霞立戶島之磯回手本欲玉拾良武君食序念

宮埼實靜見差檢地使在津野山鄉四万川村之時作贈歌首三

津野山之田井之尽見明目速事竟而還來吾背

雪消爲津野山風之寒夜者服襲而宿核麻布小衾

草枕旅宿爲湏濫四万川之數々君之面影爾所見

嘗與大神氏約往河上賞櫻花于時余先至而大神氏後至之時

大神氏作歌

我兄子之跡踏求川上之櫻花乎今日見鶴毳

雅澄和歌

獨耳見者不飽等吾背子乎戀乍居之代者在來

三月廿一日住吉社作

神主之手向幣爾比乍神御前爾散櫻香聞

同日訪小松常石丸彼家庭櫻正盛仍作歌

三苑生之左久良之花常愛伎君之面輪等雖見不飽毳

同廿二日朝將發常石丸家之時常石丸作歌

金門田爾延置繩者豫還覽君乎引留金

雅澄和歌

吾爲爾延四門田之御標繩越而可往爲便之白鳴

賀下田浦老龜谷益之父六十算

妹名根之刺哉櫛江之濱清三玉毛千歲之數哉緣良武

寄松祝

四二

旦日刺高坂山之山松之常磐爾伊座面替不爲

細木春幹往于美濃國之時作贈歌

老人毛變若跡名爾負有瀧之水裘汲來根家人之多仁

己卯八月賀山田氏母君六十齡

左根許自爾根許自而殖之若松之木垂代迄爾君者今核

己卯八月十五日夜應 上命詠瀧邊月

島傳見乍明名三吉野之瀧津瀨每爾照有月夜乎

同九月十三日夜應 上命詠月前鴈

秋田刈借廬之廬戶開置而月見夜乎鴈鳴度

贈下元眞清

嚮漫遊吳濱之日取路洲浦獲接芝眉吾子延走上遊雅愛戀至繁組綺錯羽爵飛騰豈管  
承高語深旨大開鬱結之何耶憐走渴望幸垂鴻慈揮毫數昏脫之永以爲家珍焉乃知龍

門之恩復厚陋身之上感謝懽怡何可勝言乎唯不願拙劣之語作寸分之詞而呈之記室  
聊以酬芳恩云爾其詞曰

勇魚取洲埼海者雖淺君之情四吾忘目耶

寄下元眞清

某月某日忽忝來書跪承芳旨心神開朗鄙懷除祛兼見惠墨妙數番行草八分點々有法  
程畫々有結構所謂知覺靈變之機染翰神遊之妙超他人之常格者蓋於吾子乎有焉而  
吾子情誼之厚不遺下拙頻蒙德音感謝不知所言也特正膺孟冬江上落葉舒絢錦汀岸  
殘菊猶芬郁加之三島風景最可怜伏望棹輕舟陪吾子致雅興唯山川阻隔白雲杳渺無  
由朝夕相見聊賦小什以供一笑耳筆不盡意再信可期己卯十月七日 雅澄謹啓

中島邊島上嶋手本欲紅葉之錦着人哉誰

吉川氏母六十賀篇序歌

人生之百福莫先於壽自是天幸不可求而得也今茲吉川氏聖善年算既六十矣子弟親  
族張宴于庭梅之下及招致賓客于時孟春氣淑風和梅花映杯芳香馥郁襲人黃鸝嘯々  
似述祝辭者於是衆皆驩然舉觴相與唱退齡之頌加旃况需寄梅之賀辭于四方頃者諸

賢之佳什如花之盛如枝之繁太宰苑梅之篇比此如蔑矣遂纂輯而為卷乃乞序於余因  
叨揮毫且祝曰

烏梅能波奈比々等々與々爾毛呂比等乃知欲能保吉許等故母  
理且安良受也

贈釋仙英

走蠶者乘春興逍遙永濱遂投狡狴下公執酒茗厚高誼交臂相歡好思無不言々無不盡  
焉對花式詠仰月式吟既蠲鬱結大散愁緒其愉快不可復言也大抵實刹之為地也負巖  
々之青嶺抱渺々之蒼溟松風奏琴濤響調鼓一詣則心身双清無百煩不自滅真人表之  
靈域也往歲之過訪也滯滯度日者亦在茲實破拂世俗之塵埃而使人忘歸者也加旂公  
也其德高山嶽其茲深滄海走常誦之在口銘之在心感謝詎有極謹脩片楮聊抒寸衷伏  
垂昭鑒焉又書一絕于紙尾以換軒渠

左久良婆奈天羅須都久欲乎於毛之呂美阿蘇毘之許許呂都禰  
和須良受

行滕

文政三年二月十八日集會坂井正和兄家探題作歌

旅發六其日近着率兒等行滕造禮其緒堅良爾

貝

同上

海人之子爾袖携而浦戶方鹽干之四時美今日者拾食

落花入簾

同上

春風之吹之隨意作樂花小簣之間通此間爾落來藻

二見岳眺望

同上

二見山手向爾立而海若之息津島山見放鶴鳴

水邊若草

同上

春雨之嗣而師零者池邊之水際之草者萌去來鳴

寄弓戀

同上

梓弓絕者雖絕又更爾弦緒取着不引有目八方

同夜甚雨宿同家作歌

念子之屋戶爾此夜乎不開有世伐雨之岡奈何超往六雨之零九二



正和兄和歌

春雨之不容有世伐如何爲而六倉蔓家二君乎將留

春日登三谷山

文政三年三月十日集會  
山田清賢兄家探題作歌

三谷山磐搔登見渡者河內國原霞棚曳

寄針戀 同上

蟻衣之寶之子等乎己身爾縫着津倍伎奇寸鍼毛賀

特牛 同上

角立而事負之牛之吼響其面持之不忍有哉

枕 同上

妹與吾等纏而吾百夜乎左奈須金我製有黃楊之木枕

鞍 同上

赤駒爾按置子等烏玉之夜床片去妹待等六衣

同日至夜雨降借傘而還明且反贈其傘之時作歌

風雜重而零來雨之岡不濡越來愛寸此傘

文政三年庚辰三月十五日細木瑞枝來訪贈答歌首十

見砌上山振瑞枝作歌

愛寸兒我爲形爾似登見座社此山吹者生而有鷄米

雅澄和歌

愛寸兒似比而標之花有者見而耳伊座手乎者勿觸其

瑞枝復作

此花爾思與曾做之妹之名乎告者其手谷不觸將還

雅澄復和

結手師妹之縱醒時爾社名乎谷告目花者不令折

瑞枝復作

妹名乎告難爾爲者山吹之花者根許士而吾花爾責

雅澄復和

千早振神之五十垣者雖壞吾結標乎令越目八方

同時詠庭上菌花與瑞枝歌

管士花恻怜等見座愛兒之其唇之色爾不如友

瑞枝和歌

君等妹與飽及愛之丹管士之散之殘乎恻怜等波不見

瑞枝告別作

打渡柏尾山爾居雲之立別卷惜今日鴨

雅澄報歌

打渡柏尾山爾居雲者雨等降來根君乎將留

賀幡多郡湊浦人某預拜謁之列作歌

湊之哉浦之奧邊爾石着玉香蛾與比出留時者來去來

為文政四年<sub>巳辛</sub>八月十五日夜月宴應命預賦海邊月之題

月夜見之光乎清見綿津見乃手纏乃玉能亂相有所見

為同時月宴應 東殿君命預詠潮月之題

夜副似玉藻可刈鳴戶海宇豆潮白久月照爾來

為同時月宴應 姬公命預詠月前鶴之題

我君之御代榮六跡照月似鳴而左度天之鶴群

同時預詠庭月之題<sub>南殿宿題</sub>

大殿之庭毛志彌美爾古伎敷有玉爾可我與布此月夜鴨

閱絹子浦戶礖崎記之時題後贈歌

礖崎似可我與比度白玉乎拾集為其人也誰

贈下元眞清兄

濱清見千船之湊洲崎海幸也吾兄頃者之頃

眞清兄酬和

一去城都遊異鄉朝望海市昏漁幸。

片心不動自無為。觀得波濤千萬頃。

為九月十三日夜月宴應 命預作關路月之題

足柄之箱根之關爾都末里居而月見夜者不朋友縱

為同時月宴應 東殿君命預作月前鹿之題

月讀之押照野邊爾左男鹿之妻喚聲彼此所聞

為同時月宴應 姬公命預作月前管絃之題

月清見遊為良之母殿內從小笛緒琴曾清爾所聞

同時預詠見月戀友之題 南殿宿題

惜今夜之月夜唯獨見管哉將居君之目乎欲

題梅削花

開花者山二文野二文雖見此常花叙益目頰四吉

應 東殿君命詠菊名玉葛

玉葛斷事無萬代二君之可刺菊花此

致仕君御遊礪崎御館之時從供於仁井田濱觀相撲陳思作歌

大海之礪毛動響似動爾在相撲塲之雄詰之聲

同時向府御船發礪埼之時作歌

礪前五十開本欲五百重浪千重浪敷爾又還見

文政四年辛巳十月三日申刻男子出生登時述拙懷作歌

父爾似而餓鬼等莫成曾大寺之金剛力士之為形等乎成

應 致仕君命詠菊名柴垣

御園生之八賦之柴垣數似見友可飽花爾有目八方

同前詠菊名志乃布乃美太禮

昔部乎今毛志乃布乃亂菊若紫乃色爾薰者

同前詠菊名大和言葉

唐國從渡之等聞其花者大和言葉乃種等成有寸

賀久保鷹丞七十算寄竹祝之題

御園生爾多斯美竹生慥々二立榮往六年之白鳴

應 姬公命詠池冰之題

水下經魚毛利夫良武磐床跡池之冰甚凝此夜者

南殿侍女沖野氏梨佐秩滿被許還鄉之時作贈歌

里中荷住度十方內隔之風流之手振忘渚菜勤

爲謝高田氏印刻之賜爲釋覺知所詠作歌

菅根之根毛一伏三向彫而賜有此之字形地爾置海藻八方

應 姬公命詠早梅之題

三冬零冬庭雖有咲出有梅之始花折而將挿頭

文政五年壬午元旦試筆

打度越之小里爾鳴鷄之聲爾比而春者來爾家利

應 姬公命詠朝鶯之題

御苑布之百木之梅爾朝旦來鳴木傳鶯之聲

應 命詠南殿庭梅

朝淨仕兒等之袖副似許多毛薰烏梅之花鳴

贈若菜

君爲雪消之水二袖濡而山田之澤似採有芹此

閏正月應 姬公命詠水邊柳之題

打手折蕊氣吾妹稻牟之呂川副柳萌出似來

詠春雨

曲庵之四吉屋之軒之草朽而零春雨之疾漏乍

賀楠目新八丈七十壽

朝日照潮江山之作樂花千代爾咲乞君之挿頭似

應 姬公詠尋花之題

開出有花毛有八等常不知山之奧香似分入吾

二月十又五日 姬公遊覽舟岳山之時陪從作歌

手弱女之袖吹返春風爾散而流山櫻花

題櫻花畫

五四

霞立永春日乎氣並而雖見可飽花爾有目八方

應 姬公命詠桃花之題

吾妹子之赤裳之色乎奪而有毛桃之花者雖見不飽鳴

詠海石榴

足引之片山海石榴手折持委曲二雖見不飽鳴

應 命詠南殿庭上藤花

大殿之御垣之池之底清三岸之藤浪陰爾見管

所詠大谷尙善題秋七草畫

可伎數七草花色別似丹穗經金野之見者乏者

壬午三月廿七日曉天聞霍公鳥始喧作歌

卯花之四月毛不來者不念荷今日且來鳴始霍公鳥鳴

四月應 姬公命詠霍公鳥之題

物部之磐瀨杜之古乎僂跡哉鳴本霍公鳥

應 命詠風鈴歌

橘之花香通且風爾左也久小鈴之音之涼之左

婦人之袖吹返暮風爾涼清有鈴音之吉者

御園生之千代松風之吹每爾左也伎曾渡小鈴毛由羅爾

應 姬公命詠橘花之題

萬代似見爲給倍伎島山之安可良橘花開爾來

賀下田浦弘田立仲七十壽

眞髮觸櫛浦浦之奧津浪動響々々爾事壽之吉也

江下田  
御名詠

應 姬公命詠夏月之題

吾苑之草深由利乃花咲比照有月夜見人毛欲得

七夕月 應 姬公命詠七夕

夕月之不隱伊間似天漢早榜度君者來座根

七夕露 同上

天漢河門爾立而君之舟我待袖爾露曾置爾家類

七夕河 同上

真氣長君之船出乎安之河安宿之不令寐吾待戀之

七夕橋 同上

機蹈木乎橋爾度乍待常告來去往而早見

七夕琴 同上

織女之吾矣待難爾此夕歎搔引琴音所聞

七夕笛 同上

吹鳴哉手馴之笛之聲知而天之川津似妹待濫序

七夕祝 同上

天漢水尾之不絕今之如幸往來六秋立每爾

七月應 姬公命詠野草花之題

袖垂而伊射野爾行名女郎花秋芽子尾花今盛奈利

應 命詠玉砌芽子花

御垣津之池之眞清水薰左右島之秋芽子花咲爾來

爲八月十五日夜月宴應 姬公命預詠船月之題

室戶崎吾榜來者磯觸之緣荒磯爾月照有所見

對山待月同時三條家新御簾中樣御兼題

櫻井之水底清沉玉清似所見及照月夜鳴

渡月八月十五夜東殿君御宿題

大島乎夕越來者石走垂見之渡月曜爾來

月前笛九月十三夜同前

清照今夜之月爾宮人之吹鳴小笛聞之吉毛

月契多秋八月十五夜同前

每秋月之御面之面變不爲如吾毛如是相見六

月前松九月十三夜

鶴鳴菟田松原委曲爾今夜之月爾打見鶴鳴

秋月添光八月十五夜  
君公御宿題

秋風爾色付山之高嶺從照出月之光異所見

池上翫月九月十三夜  
同前

輕池之玉藻之上爾照月乎浦回本欲雖見不足鳴

春海眺望文政五年七月門人土居高賴  
死去爲四十九日追悼詠

見度者大海之原原似立霞與毛不知無人所念

賀伊勢國山田人度會神主瑞枝父六十算

度會之若歷木原久常祈心乎神毛宇豆那間

文政四年七月報贈細木瑞枝贊賀僕遷官歌五首

懦弱哉吾乎召上而古事乎解令申常叙吾爾告鶴

書典讀人者多乎唯獨吾乎召上之言之奇也

真曲爾解申常雖念智心之無之爲便無也

倭文手纏賤吾乎殿上爾召上而在乎恐懼毛有香

書讀等所召之吾乎慇懃似言祝公之喜也

文政五年壬午秋月應 東殿君命詠菊名焚合

焚物之焚合香常思四者御苑之菊之薰爾在來

爲九月十三夜月宴應 姬公命預作庭月之題

蟋蟀之鳴此庭爾立平之見管明名清月夜乎

十月應 姬公命詠殘紅葉之題

錦香毛張留等見之者十月山之黃葉之殘奈利家理

爲賀高岡人千頭政輝母六十算詠寄岩祝之題

母刀自者五百世出座高岡之山之磐根之已凝敷母已呂

十一月應 姬公命詠待戀之題

吾瀨子乎且今々跡床去而待管居似夜之更去久

十一月應 姬公詠海邊松之題

六〇

神左振尾津之崎在一株松何怜常其見古昔所念者

文政五年壬午除夜 南殿迎陽登時陳所思作歌  
常從異爾貴有來侍宿爲殿之朝開爾春之立有者

文政六年癸未正月廿八日爲會西尾秋滿呂家儲若菜  
之題兼賀主人四十年算

春野之菟芽子採來而如今日相多宜氏菜彌年之黃土

正月應 姬公命詠山霞之題

三湯之上能樹村凌而極此疑伊與乃高嶺由霞流喪

爲賀島崎某六十齡題蘭画

長人之繼而可見爲島爾在哉常葉草毛生繁留蘭

二月應 姬公命詠雨中花之題

春雨爾沾者濕友作樂花挿頭爾不刺過之得目八方

三月應 姬公命詠松上藤之題

池邊之松之末葉乃藤花乎烏理爾乎烏里今開去來

四月應 姬公命詠新樹之題

四月立登時見者向崗之木立志彌美爾水枝指在

五月應 姬公命詠磯霍公鳥之題

霍公鳥磯毛動響爾鳴音乎如何聞也朝入爲子等

賀北川勝知七十齡

萬世似五十衣染益而吾君荷奉仕勢今毛見如

六月應 姬公命詠舟中納涼之題

小船乘此島陰之暮風爾紉解開而遊久吉裳

七夕雲 擬牽牛之意

文政六年七月七日  
姬公命作之

早往而今夜者將纏天雲之千重爾重成流遠孀之手乎

七夕露 擬織女之意 同上



暮露爾玉裳溼漬而久堅之天之川津似君待吾者

七夕花 擬牽牛之意 同上

秋芽子之其花咲爾遠孀之將咲眉曳往而早將見

七夕橋 擬織女之意 同上

天河打橋度年月爾吾待居等往而告乞

七夕琴 擬牽牛之意 同上

妹家道近附良之藻天漢川湍母清爾琴音所聞

七夕枕 擬織女之意 同上

高々爾君乎伊座而石枕相卷今夜不明毛有糠

七夕祝 擬牽牛之意 同上

萬世爾年者雖來經天川不通事無將相跡序念

七月應 女公子命詠庭芽子之題

念子常出立令平此庭之一村芽子能花開爾來

應需詠雪月花

零亂雪常見及作樂花許多裳落香清月夜似

題蓬萊山圖

常世島常葉松之本邊庭龜毛鶴副來集序遊有

爲八月十五夜月宴應 女公子命預作依處月明之題

右伎敷留珠之庭爾者月讀之光異爾社照度家禮

同時爲應 君公命儲裁月前眺望之題

浦戶崎押照月似榜來者兔田之松原浪上從所見

同時應 東殿君命詠池上月之題

鳴鳥之聲慕來而妹手乎取石池爾照有月見津

同前詠海月之題

八十梶懸吾者榜出六浪之間從押照月之光潔之

爲九月十三日同前詠月前薄之題

眞十鏡清月夜爾吾屋戶之一村爲醉寸一目見爾來根

同前詠月前擣衣之題

此月之此爾來及濯衣等杼等擣兒之文爾悲者

爲九月十三日夜月宴應 命預作海上月之題

三埼指吾榜往者那波浦乃寬見與等月者照良之

同時應 女公子命詠對月待客之題

吾門之淺茅之上爾照月乎君爾令見常吾待莫國

爲餞朝夷氏往于江戶之時詠春旅之題

春霞八重山超而伊座濫公之直香之敷而之所念

應佐川家內君所詠貴賤翫月之題爲八月十五日夜月宴

宮人之遊今夜之月夜吉三出而來爾鷄利山田守翁

同前詠月前紅葉之題爲九月十三日夜月宴

月清三雖見不足金山之舌日下爾屋取香爲猿

秋月似鏡三條家新御座中棟八  
月十五日夜御宿題

秋夜之月光矣大虛似磨而懸有鏡跡見津藻

月前祝同前  
九月十三日夜御宿題

君之代之長五百秋乎如是爲管清月夜爾樂遊目

文政六年癸未冬十月朔奉 致仕君命敬詠玉庭菊花

旦庭似出立平爲嬖孀等之袖並丹覆白菊花

癸未十月六日應 東殿君命詠名所時雨之題

猿帆之內從鍾禮零敷滓鹿山黃葉將挿頭時來良之

十月應 女公子命詠遠近落葉之題

龍田彦荒脩爾家良之許智碁知乃丘邊之路爾黃葉落敷

癸未冬十月五日 東殿君御遊稱名寺之時從供作歌

吾君之御供仕而不念爾潮江山之紅葉頭刺津

同時令侍臣探題裁歌探得山家苔之題敬賦歌

山里之君松陰之苔藓今日之爲等曾兼而織劍

十月廿又四日夜會柳井千春翁家探得居醒泉之題作歌  
古乎懸管本名雖恐居醒之清水結而飲津

十月廿又五日訪來正躬直翁家見庭前黃葉作歌  
率爾似吾者來西乎君家之舌日之下爾此日暮津

冬懷舊 刈谷脩能翁死後四十九日法會追悼

久萬山之松之葉凌零雪之彌重布二無人所念

爲十一月三日會楠本美水翁家預儲題詠冬月

窓超爾押照月乎蒸被奈胡也我下從見樂之吉裳

癸未十二月六日 融相院君七回御法會之時奉爲追悼應

女公子命詠寄夢懷舊之題 十一月十三日奉之

黑玉之夢爾得管似古矣懸乍本名啼耳四所泣

故鄉雪 十一月十九日應

大皇之見爲之三吉野見卷欲名積序吾來雪之零久爾

古似戀乍來者八釣山木立毛不所見雪零亂 此一首不啓

夜寒重衾 女公子命

乞吾妹夜床寒之今一重着襲而左宿名其小衾乎

雪中待友 女公子命

松枝之地爾附左右三雪零穴面白重二見人毛我母

寄扇戀

愛八師君之手馴之扇似毛成申鬼尾戀乍不在者

文政七年甲申春正月應 女公子命詠峯樹帶霞之題

片崗之此向峯爾吾蒔之椎之左枝爾霞霏霽

同年春二月應 女公子命詠江上春月之題

春霞流堀江能水際似由移布月乃光乏霜

賀安藝郡安田鄉清岡某七十壽

平久安久伊座安田河逝湍能水乃絕世無荷

七八

三月應 女公子命詠落花入簾之題

吹風似小簾之寸鷄吉用散亂花爾勿觸曾屋內雖掃

柳井千春死去之後集彼家各述哀傷之意之時作詠  
歌思辭思將念時々者彌昔之所念鴨

島崎利鄉翁得雕弱浦之形鏢之時應需作歌

劔刀名爾耳聞四弱浦能蘆邊乃鶴者此間西在家理

夏五月十有三日應

東殿君命詠名處鵜川之題

丈夫之鵜川立良之辟田河々湍光箒指所見

應 同君命題霽雨亭圖

黃葉之散飛時荷入居而如是偲名彌年之葉似

四月應

女公子命詠鞞中霍公鳥之題

客爾師而家戀敷似乏雲關飛超而往霍公鳥

五月應

女公子命詠池菖蒲之題

吾屋前之垣津乃池能漢女草玉爾可貫成爾家良受也

廿代神社司某賀母六十算之時應需題多度山美泉圖

老人之變若云水曾常倍爾多宜氏今核此越水平

爲或娘子所詠題藤花畫

目頰布人乃咲容似名副大王非時藤之花哉此花

應葛目弘守兄需題壯子乘牛歸家畫

打度田居毛見之欲山毛吉牛之步者遲友縱意

又題兩人歡雲氣畫

詳審荷觀坐吾脊兒凶久毛吉久毛何能祥常將定

海邊眺望

浪上從所見者與之小島香聞海處女等之乘有舟鴨

六月應

女公子命詠舟納涼

舟並而來之久母知久名庭方蘆葉左夜久風能涼者

七〇

七月應 女公子命詠草花盛之題

金野之花之種々色別似丹穗經盛八今西有良之

七夕天象

此夕立白雲者棚幡乃天道通爲領巾之靡香

七夕地儀

天人之妻問宵常道邊之草副四奈布情之有羅斯

七夕雨涼

天漢初秋風之吹笛荷霖曾保零夕涼母

七夕喜晴

言借石雨雲晴奴銀河舟出速爲六不知夜經可也

七夕惜別

事問毛未盡者天河撈別南手著不知裳

七夕後朝

天河朝川度別去君之爲形之影爾所見管

七夕契久

年荷裝吾引船之綱手繩將絕之意御念勿勤

以上七首文政七年甲申七月應 女公子命作之

爲八月十五日夜月宴應 女公子命豫作山月入簾之題

珠垂之小簀之間漏而山葉乃左々良榎壯士此間似來坐有

同前應 東殿君命豫作依月秋勝之題

五十殿寸而秋山吾者怜毳黃葉變木葉爾月之光夜者

同前應 彈正君命豫作中秋宴之題

清照今霄之月爾向居而思人共飲久之吉毛

同豫作高樓明月之題

樓似登立爲而國見爲須今宵之月之光清母

同前應 佐川家內君命豫作終夜見月之題  
十五日出之月之宇々都々良々傾左右二雖見不足鴨

同前應 美代子君命豫作都月之題

宮尾見名舍人壯士裳月清見伊蘇婆比出而遊此夜者

後八月應 女公子命詠聞八月翫月之題

月夜見之御靈賜而此清望爾二度會之貴也

詠本草蚌蛤類應谷金  
吾丈需

疝瘕食而令愈常君爲吾朝入來蠣其此蠣

賀中山嚴水翁六十齡之時應需題山水畫

山川乎高見清三諸社世之長人者家居爲良目

爲九月十三日夜月宴應 東殿君命豫詠月前鹿之題

月夜好三妹二相六跡出往者山之跡陰爾左小牡鹿啼裳

同前應 美代子君命豫詠月出山之題

山葉從出來月之影浮而今夜者將飲伊射西吾妹子

同前應 女公子命豫詠月浮澗水之題

三笠山真楫撈出而月之舟細澗河之浪爾絕塔

同前應 佐川家內君命豫詠月前菊之題

曜月之光者色乎雖奪有其香者灼然白菊之華

同前應 彈正君命豫詠月下聞砧之題

三空往月似競而手母須麻爾衣擣子者孰思妻

同豫詠月泛海上之題

海原能道乎多遠見夜降而奈豆左比度月人壯子

十月應 女公子命詠里霖雨之題

山曠爾麥種兒等之袖通鐘禮零爾在高坂之里

十一月應 女公子命詠屋上霰之題

枕附孀屋之上似打丸雪甚勿打其宿難名國

十二月應 女公子命詠惜歲暮之題  
荒玉之來歷往年乎留不得惜盛乎將過毳

甲申除夜侍宿作歌

世間之憂久毛白土侍宿爲而春待今夜樂所念

文政八年乙酉歲旦侍作歌

吾君之御代浦安爾侍宿爲而真毛今朝者春爾相有鴨

同朝玉砌聞鸞作歌

御苑生能梅之下枝爾鸞之今朝來啼始聲之宜也

正月應 女公子命詠梅薰風之題

春風能該來有吾妹子之牆津梅之花之香之吉者

二月應 女公子命詠瀧邊花之題

瀧上能櫻花乎折卷爾名豆柴比渡吉者香聞無

始見長瀨清玉之時清玉作歌

飛鳥井之遠流能真清水之夷之里居爾湧出之鴨

雅澄報贈歌

明日井之流乎遠三君無者孰可將汲與惜真清水

三月應 女公子命詠春旅之題

春楊取持見者真氣長妹之眉曳所念鴨

朝比奈清躬往千江戶之時作贈詩

武藏野之小岫之雉子動響者言告遣之間使等知

三月廿七日曉始聞霍公鳥啼贈交遊歌

霍公鳥汝初音之玉在者貫而毛公似令見益鬼緒

賀福原弘道母八十八齡

今之如真幸座而八十餘八之坂路乎八度越座

四月應 女公子命詠牆卯花之題

霍公鳥音聞香光出來而妹之垣間之宇之花見津藻

四月廿五日夜會于楠本美水翁家寄橘賀六十齡作歌

三苑生乃植木橘百枝刺彌佐可波延年百世經左右

賀香美郡椛山鄉小松幸盛四十算

神左振小松神社爾酒座而禱萬代者誰為呂毳

五月應 女公子命詠水邊螢之題

山并能底毛照及夜降而水草之上爾螢多集有

六月應 女公子命詠關路鷄之題

相坂之關毛動爾打羽振呼立鳴裳何怜其鷄

同月應 美代子君命詠夏月之題

率子等月夜清門爾出而鳴霍公鳥草取毛將見

稚稻水溪八趣之一

打度高毛洿田裳彌日異繁益歟水乎多見社

應 美代子君命詠名所七夕之題

天在哉左佐羅乃小野乃菅枕今香將卷其遙孀等

七夕言志

天人乃相夜登聞者吾副似情動而寐許曾不所宿

牽牛之往來天道乎振仰而見吾並荷有叙金鶴

秋花勝春花

開花乎春者言杼秋芽子爾豈不益歟盡情者

八月十五日夜居 泰嶺院君喪仰見明月述拙歌

今夜之月夜者清照有杼晚闇耳見成鶴

今夜之月夜者清照有騰代者曾無君之不在者

九月十三日夜同前一天瞻矇月光不明仍聊述懷

不明今夜之月之所見鶴雲可輕引吾淚可聞

衣笠村住人平石覺右衛門母六十賀

大君之衣笠山似茂立千代松蔭爾住人哉誰



公文鍊平六十賀

萬代似君之可見島際庭誇而開有作樂花副

文政九年丙戌正月十八日侍 東殿見梅花應 命

萬代似見爲明六此花之盛爾相有今日之貴左

正月應 女公子命詠雨中鶯之題

春雨爾之努々爾濕而鶯者木傳鳴毛妻求等香

二月應 女公子命詠野外雉之題

榎野之霞隱爾妻戀常音爾耳啼而雉左乎騰流

同月應 彈正君命詠歸鴈之題

開花爾不相常爲香春設而雲隱管歸其鴈

同前詠二月見花之題

率今日者水口祭出而將爲峯上之花見香光爾

三月應 彈正君命詠勿來關之題

古への人は勿來の關なれと面影のこる山櫻かな

中山參枝六十賀詠松間櫻畫

長人之挿頭之爲常櫻花千代松蔭爾開出家良受也

或人六十賀詠寄匏祝之題

月讀之持有越水多宜婆許曾世之長人者匏持有良目

三月應 女公子命詠名處藤之題

船並而率垂姬爾古之人之挿頭之藤花見爾

賀竹處西村雄次者四十齡

竹根之根足處乎萬代二不動家常住人哉孰

不知也河近江國彦根家老督學軍帥  
中野平馬關溪六十賀詠題

萬代爾水緒之不絶而不知也川伊佐乎之伎名乎四方爾流左禰

四月應 女公子命詠尋餘花之題

今一重超而尋者晚手爾在山之櫻爾蓋將相鳴

同月應 彈正君命詠聞子規之題

乎理明之待四毛効久子規山彥令響今曾鳴成

日前社 紀伊國家士野呂九一郎介石翁八十賀配題得之

萬代登祈留心乎明久所知給根日前神

熊野

萬世似有通乍君曾見熊野之御埼幸在許曾

那智瀧

落瀧津那智之大瀧山動響君之千歲乎言祝之吉者

五月應 女公子命詠樗

霍公鳥喧西日從愛寸妹爾相市之花開爾家利

同月應 彈正君命詠五月雨

五月山木立毛不所見零雨之雨間裳不開幾日將經

寄龜祝 坂本長兵衛者家一日有龜忽焉出于砌上因是乞祝贈此歌

音耳聞之常世者龜之住君之此家之島西不在哉

六月應 女公子命詠閨中扇之題

烏玉之夜床似副裳此頃者手馴之扇手從離難四

同月應 彈正君命詠聞蟬之題

七絃之八絃之琴乎清々爾調管啼蟬聲鳴

七月應 女公子命詠秋戀之題

秋霧之輕引小野乃暮露似濡管來四乎不相往日八

同月應 彈正君命詠初秋雜咏之題

芽花開在乎見者棹牡鹿之孀問秋爾成爾來霜

八月應 女公子命詠鴈聲遠近之題

孕瀉水尾引來者夜降而奧似藻邊荷藻鴈之音曾啼

同月應 新御館君命詠吸江明月之題

細浪緣流石根灼然月臨照吸江之海

入交道齋六十賀句題詠青羽山之詞

常之閑爾青葉山之本繁榮伊座根今毛見如

十一月應 女公子命詠月前千鳥之題

奴婆珠之月爾向而吾門爾數啼乳鳥雖聞不足鳴

十二月應 女公子命詠爐邊閑談之題

思共向熾火之起居管相語夜之不足裳有毳

# 山齋集短歌之中

藤原雅澄詠

文政十年丁亥正月元日試筆歌

男盛之時來向等初春乎待歡有時毛有之乎

吾盛降友繼吾妹子之玉之光儀能不舊在世者

正月應 女公子命詠春風解冰之題

佐保風毛能杼西吹而磐床常凝四河氷行邊不知母

二月應 女公子命詠折蕨遇友之題

春野爾左和良妣折登出不來者振西公爾相益其

二月廿六日獻御室濱所産花貝美代子君副歌

君か代を萬代かけてさきにはふ花のかひある春にやはあらぬ

三月應 女公子命詠花下言志之題

櫻花今開有如吾盛常如是在者何香將嘆

四月十六日始聞霍公鳥喧獻卯花 女公子歌

足曳之山霍公鳥草取而今日啼始四枝爾曾在家類

為歌子所詠題菊花畫

咲四從落云事毛不效而世乎長秋之花爾曾在來

見鏡傷頭白作歌

何時間爾黑髮變白斑劔壯子等念在吾乎

竹間黃葉 應宮崎九左衛門齋

殖竹之本副枝副照左右荷吾家之苑者黃葉始在

四月應 女公子命詠殘花何在之題

去來子等何方之山能與香似歟開有櫻之散遺而在

五月應 女公子命詠雨中早苗之題

久方之雨間毛不置手肱爾水沫畫垂五月苗取為毛

六月應 女公子命詠對泉忘夏之題

藤原之御井之眞清水挹時者肌副寒秋不立友

七月七日應 女公子命詠七夕舟之題

安乃河安寐毛不宿而吾戀之妹乎相見六舟出早為與

閏六月應 女公子命詠河夏祓之題

往水爾潔情者速川之瀨織津姬之神之任意

七月應 女公子命詠荻風似雨之題

夜降而雨香零來否乎鳴左々羅荻之葉風左夜久鳴

賀布師田人松岡文三郎六十算

生藥吾者不奉萬世荷布師田河之牟奈岐取食

初秋之月聊陳所心

勝且毛蚊蛾與比出之白玉之奧津伊久利爾又哉將石着

爲八月十五日夜月宴應 女公子命豫詠松間月之題  
名次山角松原委曲爾今夜示有月讀壯子

秋懷舊九月桑名才八  
七月回忌追悼

古爾戀管居者床隔爾聲裏觸而蟋蟀鳴裳

八月十五日夜臥病床作

無恙吾身西在者無用爾寐而將明哉惜此夜乎

病中呻吟歌

垂佩而大路往來之刀緒似比者蜘蛛之巢撥去留毳  
月累病之度者荒熊乎取而將搯手力毛無

報贈娘子歌

凡爾吾矣莫憑天地乃神之理無者社在目

離居而長戀不爲者吾妹子之下爾結有紐緒似欲成

更報娘子歌

立而居而戀年聞者大海之荒磯之浪乃在曾金鶴  
百重似藻隔而妹者雖在一夜毛夢爾不所見夜曾無

更贈娘子

雲爾飛藥毛不如愛寸妹之笑顏乎唯一目見者

病有身爾戀之奴之責來者重馬荷爾表荷打等香

爲九月十三夜月宴應 女公子命豫詠里月之題

妹乎置而吾耳哉將見大原之古之鄉爾照有月夜乎

九月十三夜伏枕對明光嘆慨作歌

立而母見居管毛可見此清寸恠月夜乎宿而哉將明

題扇山水畫

山川之清寸見管如是許曾年爾將偲今毛見如

題扇鷄畫應門田  
藤作露

開初之天之磐屋戶所思而長鳴鳥曾今毛貴寸

文政十一年戊子爲八月十五夜月宴應 女公子  
命豫詠深山見月之題

足檜木之山之奧香似如此幾秋經而香月乎見津濫

爲九月十三夜月宴應 女公子命豫詠花洛月之題  
山遠京西在者隈毛不落照有月夜之文爾友四左、

十月晦悲傷門人原重勝死去作歌

年月爾思積來之古事乎誰與共爾香今者將語

十二月六日門田藤作初七日忌供花歌

左右袖以淚拭而不念爾今日之供養爾折有花此

文政十二年己丑正月元日作歌

三十餘九爾今日成爾來花爾名副而將見人毛欲得

二月七日賀羽山甚左衛門六十齡

朝爾異爾向羽山之山松之常石堅石爾榮座君

二月或娘子臨旅行寄來鏡之時作贈歌

相及之寄物爾見與等於已勢多留手馴之鏡從手離目八方

贈麻袋同娘子之時副歌

東路之道八十隈々毛不落手向好爲而早歸座

二月十七日 女公子往江戶之時贈供奉女郎三野子歌

搔彈哉玉之緒琴之事毛無道之永道乎仕給根

三野子嘗善箏曲故以緒琴爲歌詞

題鹿鳴葉落之圖

秋山之黃變且落左牡鹿之鳴成心木葉知兼

題水邊山振之圖

河上爾咲有山振常不止雖見可飽花爾有勿國

題龜畫

常之閉爾龜曾遊有是也此名爾負常世之島西有之

九月十三日夜爲月宴應佐川家內君命詠月萬秋友之題  
萬世之五百長秋爾九月之今夜之月夜雖見將足哉

壽福岡家母君六十齡之時應需詠寄梅祝之題  
御苑生之若木梅者萬代之挿頭之爲常殖而氣良受也

文政十三年正月元日

及昨日無面在來白髮母身爾相應久成曾爲爾來

壽本山鄉高橋某母七十年算

栲繼之長壽者向南山爾棚曳雲乃絕日在目哉

應岡宗泰純需題著紀子舊迹古瓦

淑人之居之御館乃古乎見管慕常殘留形見序

應羽山某需題牡丹蒲公草蘭畫

按倭名抄牡丹倭名布加美久佐蒲公草倭名不知奈而蘭獨無雅名也此則今人所賞如麥門冬者而世俗以字音呼之所以後世渡來皇朝也而倭名抄蘭

倭名布知波賀萬此菊類之蘭而與此畫者非同類也明矣

底牡丹副不生蒲公草禮婆影見花之何爾障蘭

爲奉納幡多郡不破八幡宮詠社頭花

皇神之牛掃杜之作樂花宇倍誇之久丹穗日而在來

壽門田信順母六十齡詠寄竹祝

御苑生之五十小竹群竹率爾言祝目八方其長人乎

賀服部良能六十年算詠寄松祝

三菌生爾立在于松常吾瀨子常榮座六年之白鳴

八月十五日爲月宴應熊彌太君命詠山月入簾之題

山之末從月者湯移去玉垂之小簾之垂簣毛搔上敢名國

同時應福岡家需詠名處月之題

伏超從不行友縱意清照今夜之月爾浪者數點

橘大枝所詠詠初春海

礪上爾初鸞之啼聲乎聞而將往序舟暨泊

九二

八月十五日夜爲月宴應 東殿君命詠秋月聞笛之題  
秋風爾笛音所聞宮人之月見香光爾遊爲等霜

爲九月十三日夜月宴應 東殿君命詠月照紅葉之題  
高圓乃山之黃葉頭刺跡香野上宮爾月之照覽

同時應 熊彌太君命詠九月十三夜之題  
九月之今夜乃月乎何伶遊飲夜乃不開毛荒糠

十月十日應 東殿君命詠菊名金丁子  
名西負而金色爾開菊之香副奇久唐米伎爾家利

二上氏母君今茲年算既九十矣見示其縫工宛如壯女  
誠知健實因而發感聊述拙意云

韓衣縫有針目者雖將讀千年之算者如何可數

爲九月十三日夜月宴應福岡家需詠月前松風之題

吾瀨子乎松吹風之寒友屋之戶者不開月之曜夜乎

哀傷葛目朝風歌

歸來六月日數管無用爾年之四歲乎吾待戀之

鷄鳴東方乎指而覓去友過去人乎往覓日八方

念之爾心違奴誰爾鳴今者將語安多良吉言

右件葛目朝風者往歲從供嗣君留在于江戶四歲于茲一時忽獲尪病頓身故  
矣仍遙聞喪不堪悲傷之情聊述小什云爾實文政十三年庚寅十月六日死去

題水邊山振畫

久我禰可毛志豆久等見之波山振乃影成水之底爾曾有家類

天保二年辛卯正月元日試筆于時年四十一

白髮生事者不念人並似今年毛春乎待歡津

賀尾崎直壽六十算詠寄松祝之題斯人家葛岡神社傍

葛岡乃杜之尾崎爾松殖而自今日千歲乎神爾將禱



壽島崎利鄉翁八十算嘗少時從翁授謠曲因思當昔意及是  
千年祝言壽令響謠之波今日之宴之爲西在來

賀醫家村井卓純六十算

走出之御井乎清美萬代平生藥煎而所聞以乎勢

賀前田勇作六十算題竹畫

殖竹之本副響打舉而言祝千代之疆不知母

重詠夏祝之題斯人性喜玩假山因意及之琴

霍公鳥千代爾將來鳴島山之殖木橘今盛爾在

賀宗石盈承四十年算之時配題得奈留山香山美郡被山

塵泥之積々而奈留山乃雲爾着及榮座君

應池田倉主需詠酒

酒見附榮流每爾區之乃神少御神乃御靈之所思

鮫屋彌助者及八十之時賀被賞高年賜物

八千歲爾長經座而如今日愛盛爾八遍逢座

鸞聲和琴

吾兄子之搔彈琴爾競而來啼鸞雖聞不飽足

賀室岡山下人長尾鷄彥四十算

皇神爾受日而殖之室岡之千代松木之疆不知母

藤井眞澄所詠詠春苑

百千鳥囀並似梅柳錦乎張有春苑香聞

題牧童畫

已騎牛之步乃湯鞍千吹見不吹毛謠鄉曲

八月五日往于安藝郡羽根浦之時或娘子貺絹帶聊發  
歡情贈娘子歌

廻將逢驗爾縫而於已勢多流錦御帶地爾將置八方

同時上道過訪久万村醫生村岡直道贈歌

遺而在親等妻子等爾萬代乎生藥煎而令賜吾背子

九六

同六日超安藝郡大山之時作

秋風之布久爲乃里爾妹乎置而安藝乃大山超勝奴鴨

同七日超羽根中山之時作

大鳥能羽根乃中山超來者昔人之面影爾所見

同十五日夜羽根灣仰見月光作

遙々爾南海路照度月光乎今夜見鴨

同時思故鄉人作

名西負者急飛往而羽根灣爾今夜者妹乎率而來名猿乎

九月四日家婦折取黃葉寄來之時聊述懷作

家人似戀情之通而哉此黃葉乎折而遺在

同月十三夜仰見月光作

大鳥之羽根之御埼乃與浪八重折之上爾月照爾來

家人似見卷欲裳大鳥之羽根之浦箕爾照有月夜矣

同夜檜垣蔭守訪來於旅館且贈歌曰

千鳥鳴羽根之河原從足沾而君乎念常直渡來去

即荅曰

千鳥鳴羽根之河浪敷々荷戀乍待之代者在來

又歌曰

言借之心毛今夜打霽而思人共月見吾者

月見常君之來座有驗在而雲吹拂羽根之浦風

爲門人所詠詠春日登國見嶺之題

國見山霞霧合而遙々似海原毛所見國之秀毛所見

九月廿八日贈檜垣蔭守

露霜似山乃木葉毛色付奴頭刺六跡云而將來人毛我母

十月朔與友人遊羽根山翫紅葉

山齋集

九七

十月鐘禮爾競黃葉乎思人共挿頭鶴今日

同時檜垣蔭守攀折紅葉歌曰

白妙之衣之袖毛照左右黃葉挿津不見人之爲  
仍和之曰

思子之頭刺之爲常吾勢子之折有紅葉之丹穗日者裳穴似

翌旦贈檜垣蔭守曰

足曳之山副照之山褻乎思其子之如何愛寸哉

十月六日贈檜垣蔭守

石椅踏羽根之河浪雖寒直涉來根待乍將居

蔭守和歌

石椅踏羽根之河浪雖寒待年聞者何香將厭

同十日贈檜垣蔭守

羽根山之岑上之黃葉折挿頭遊之事乎忘而念哉

自十月廿五日至同廿七日奉爲鎮護國家令僧徒於金剛頂寺轉讀大般若經依

差檢其事使便眺望海上聊述拙懷

最御碕庭靜見常室戶之海競榜出留海人之釣船

十月廿七日在于羽根旅館遙聞祖母喪悲傷作

羽根灣之信名負者飛往而唯一目見而別爲申尾

事竟還來左右眞幸而百世座常云之公者裳

十二月廿日檜垣蔭守贈來歌

春立者吾兄君似別蛇年之此方荷千歲母經鴨

和歌

千歲欲得常君之令聞乎如何爲者今來春乎避乍將居

天保三年壬辰正月元日在羽根旅館作

花咲似爾布夫爾咲而眞氣長子等似可相春者來荷家理

爲八月十五日夜月宴應 大學君命詠野露映月之題

許知碁智乃野之衣寸不落映月似露乎毛玉常誰香不見將在

為九月十三日夜月宴應 同君命詠松上月之題

向崗之公松葉爾狹夜通湯徙月者雖見不足來

同夜田野灣仰見月光作

由多爾念旅憂乎令和津磯之埼々照月乎見而

今夜之月夜乎清見綱手引奈半泊爾船之依所見

去年毛見津來年毛見六大鳥之羽根乃御埼爾照有月夜矣

十月廿日家婦折取黃葉寄來之時聊述懷

愛寸哉此黃葉荷家妹之咲儼乃丹穗日比來受也

十一月十三日田野旅館遙聞中山嚴水兄喪哀傷作歌 實依宮地

月立者早還而相見管語放六等念四鬼尾

題不盡山畫

不盡嶺者山之大王諸社神之御代從高貴寸

楠瀨大枝所詠詠曳菖蒲之題

紅之赤裳涅漬而手母須麻爾菖蒲曳兒者誰思妻

為奉納某社詠蓮

蓮葉爾渟有露乎青玉之水江玉常打見鶴鴨

楠瀨大枝所詠詠松添榮色之題

零置之蒲太禮母消去而一松一綠爾榮往所見

為奉納朽山鄉公士方大明神岡宗成安所詠詠初花

開初山櫻花手折來而神之御前爾先曾將祭

壽幡多郡森澤村里正安田並穗母六十年算

坂超而伊豆多神社丹手祭將為千代似常禱人祖之為

遊覽名羽鄉瑟琶瀧作

昔誰瑟琶打音丹比管此多藝都湍之名丹令負劔

天保四年癸巳正月元日試筆

童子等我待歡有每春丹身之老落之不來物丹欲得

食時三恩歌

穴貴君之賜有御田穀等者神之御靈叙祖之恩序

應橘大枝之需詠遠村梅之題

遠方之里之三中能梅花今開有所見往而手折六

在安藝郡和食官舍之時偶得聞到八流山千束橋古跡千束橋出于印本土佐軍記今成一圓田地後人號其他以字音呼之如善俗焉里人云往昔此地有大沼造橋往來也先年發沼底者得橋柱殘杭云仍作歌曰

千束云名耳殘而八束穗之靡田面跡成爾來毳

正述心緒

野干玉之晝夜不別雖思有不遇而在者人目多見社  
狗劔和食之濱爾依浪並西思跡所念勿妹  
吾妹子乎爵西念者如此許戀乍將在哉人之子故二

如此爲管後會六跡吾妹子之不云在世者生而將在八方  
吾妹子之咲儻之丹穗日日間爾懸而本名安寐不令宿  
從初不相有世婆如此許心盡而吾將念哉  
夕去者將會跡妹者令聞友人事繁何如吾將爲  
人事者思惠也言痛雖讒其爾障而不相將在哉  
夕去者將會不遇乎告來嘗妹之使乎待曾金鶴  
如此耳甚者和備自後遂二不相常妹之云者社有目  
客爲而相見妹乎月立者家爾還而後將戀疑  
如此耳將戀物友不知爲而悔妹乎相見始鶴  
別去者又逢事曾難將在目勿乏曾今暫谷  
石瀨蹈夜道勿行跡人者雖云待覽妹乎思金津藻  
新枕纏始而從吾妹子二晝夜不云戀度鴨

爲八月十五日夜月宴應 大學君命詠終夜翫月之題

今夜之清月夜乎居明見管遊杼飽足名國

八月十五日夜月光清明和食濱遙見羽根崎作

璞之三年之秋乎大鳥之羽根之三崎爾照有月見津

爲九月十三日夜月宴應 大學君命詠湖上月之題

新治之筑波之山從雨霽而鳥羽之淡海爾月照有所見

同夜和食濱仰見月光作

大海之磯之崎々隈毛不落照有今夜之月乃清也

秋日和食灣作

阿左奈藝爾安毗伎須等那良之阿麻妣等乃安古與波布古惠故知碁  
知伎許由

和多都見乃神乎伊波比氏比久阿美爾宇美佐知於保久阿羅射良賣  
夜母

引綱爾幸哉在濫呼立而海人散和久灣毛動響似

天保五年甲午正月元日試筆

四十耳荷思而有之乎四十餘四常云歲乃春者來家理

二月八日幡多郡上川口安光敬八家作

昔見之小櫛山者神左備氏木高繁成益有來

山高三瀨音清見客衣將發田時裳不取念鴨

同十一日窪津浦作

勇細鯨寄來常大海之磯毛動響似船曾動有

渡津見乃海幸多諾社海人子尙毛咲榮來

綿津見乃神惠者漁爲海人之子等毛安夫佐波受家理

同十六日送奧宮氏自窪津歸津呂

榜別君之座者人皆者濱爾並居而戀哉將暮

同廿一日家妻來書曰比日此地櫻花滿開仍聊述思

咲出去常吾爾告來之家妹與櫻與二面影二見湯

三月十日朝會同志來語旅館曰津呂山櫻滿開亭午請欲共行驅盡賞遊于時俄頃天陰雨降不堪步徒述遐想之意作歌

今日往而不挿頭伊間爾作樂花此春雨爾將變香  
搔陰入雨之不零者草枕旅憂乎令慰猿尾

應橘大枝之需詠風光日新之題

烏梅花開往見者彌日異諾吹風毛篋跡西在來

四月十七日聞霍公鳥喧作

大手祭小手祭山之山彥之相響左右鳴霍公鳥

池蓮

花蓮開往池之島山之數雖見飽足日八方

八月十五日夜窪津遙見布埼作

妹名根之曝布埼灼然多田塔浪爾照月夜鳴

十一月三日朝見雪作

吾妹兒之使將來歟常門爾出而吾松樹爾三雪零有

十一月還幡多郡之後贈鯁貝于某氏副歌

儲多海興津島圓真經而重因有世變營棕仄方

天保六年乙未正月元日作

五十里長爾課役乎所徵之昨日爾母不似今日之面持

正月應橘大枝需詠早春柳之題

鸞之今日啼苗荷出見者門之青柳萌始去來

題梅花畫

鸞之待歡有春日爾諾毛開有烏梅我花鳴

愛菊待客 應森下氏需

希將見人副待留菊之花色副香副夏借寸屋戶

四月廿一日朝始聞霍公鳥作四月十一日立夏節二應

乎理明待之母知久里響今日來喧始山霍公鳥

題鯉魚登瀛畫 應岩鄉氏

三空往雲爾漬友水上乎不見而可止吾爾在名國

題梅花畫 同上

繩延而守管將居罵之心相念梅開去來

同前 應宮崎八矛需

將移時者雖莫人間開而目將離常念花爾在勿國

爲八月十五日夜月宴應 大學君命詠月不撰處之題

八重六倉覆庭爾置露乎珠爾作有此月夜鴨

爲九月十三日夜月宴應 大學君命詠池上翫月之題

今夜之月之爲常衣穿良志底毛漱毛清隅之池

九月應 君公命詠菊三首

菊名小島崎

山吹乃色爾益而身爾叙染小島崎乃名爾波雖立

菊名霞山

色毛香毛不隔物乎霞山何故可々留名爾波立覽

菊名鞍馬山

鞍馬跡者聞物可良爾其山之名立留春之花毛不及名

十月五日實阿上人還于伊豫國松山之時作贈歌

松山之待年聞而雖急吾將言問暫待公

岩井廣輔往于安田之時作贈歌

春去者安田河之河母瀨爾狹走年魚乎漁而來座禰

同八日夜柳原家餞安田浦宰岩井廣輔之時儲作朝鶴之題

朝立而旅行人乎松陰爾群居而鶴之聲驟奈里

廿四日夜北原敏鎌家宿題寄衣戀

如何將在衣取着裝管吾念兒等爾老可隱

十一月十日朝見雪作



朝戶出之庭毛波太列爾零敷去昨夜之夜床者諾寒去來  
吾蒔有麥之若蕘所埋而嘆白妙爾雪曾零有

同十四日夜宮崎八矛家會宿題祝

子孫之八十之連屬八桑枝之可立榮始彘今日

題櫻花畫應島村雅風需

誰人之言諾而櫻花散常云事乎不習在覽

寄竹祝入交道齋七十賀

萬代乎言祝聲者殖竹之本副枝副動響動響似

寄水祝賀市川秀碩六十算

生歸留今日之生湯爾挹水乃水脉乃不絕千世者經而申

天保七年丙申元日作

正月立今日乃此日乎指折待歡有童兒欲成

同日齒脫聊發瑱作

不所念老舌出而初春之今日之吉詞曾余々美始多留

同四日始聞鸞哢作

吾家在梅之早花咲四從待曾暮之汝之來啼卷

同廿四日夜會宮埼八矛家餞北原敏鎌往于江戶之時攀折梅

枝作歌

今日之如梅乎挿頭而將遊今將來春者急歸來根

寄松祝池上官助六十賀

常磐成松枝耳會長人之長跡結情將知

三月廿一日朝家婦告霍公鳥喧發感述懷作

同廿二日  
立夏四月節

霍公鳥喧跡告常一音毛未聞耳香老有

同廿二日聞霍公鳥詠

遙々爾啼過度霍公鳥誰屋戶之間爾草將取跡香

爲八月十五日夜月宴應 大學君命詠遊浪速浦看月之題

月清見泖箕回者網引為難波壯士常人者云蘭

贈粟子於或娘子之時作歌

苛立而男々敷所見之其尙毛君爾依而者咲而落來

為九月十三日夜月宴應 大學君命詠遊須磨浦看月之題

月清見浦愛見為間之浦人之鹽燒衣乃來穢管將見

家君賀八十齡之時聊述拙懷 今年有故未誦

老人毛童兒毛率八千年之始爾今日者壽觴將為

賀清水氏母六十齡

萬代爾將澄清水之鏡庭面變不為影毛所見良師

神祇 十一月十五日會家之時探題作歌

葛木之一言主之一言者懸而將禱雖恐有

野雪 同上

物部川夕渡來而香美野乃今夜之雪爾名積鶴鴨

名處戀 同上

三禮管妹戀往者鏡河移影副無面在來

贈客 同日夜微雨降因作此詞

和久良婆爾來座有君乎將留爾今夜之雨者敷而不零香

室津人齋藤文郁七十賀題羽戶崎

在管裳五百世通為五百重浪來緣羽戶崎幸座而

弘岡人深瀨彥四郎母六十賀無題深瀨氏家鄰新川

新川々瀨深逝水之流而不絕長人之齡者

天保八丁酉正月元日試筆

童兒等之人跡成社然為蟹歡有春庭有家禮

同六日衛城西門之時始聞鸞作

高阪之御垣之谿似今日不來者先鳴鳥之聲聞猿八

思故人聊述懷

春去者採而多宣武等妹之殖之垣津之青菜過去計良受也

二月八日到于吉松氏見梅花作歌 嘗其家號烏梅園仍有此歌詞

古事乎相語香光烏梅園乃梅盛乎相見鶴鴨

折花供故人靈前聊述懷

歎管手折來去來鳥翔成在通管見益吾妹子

見櫻花述懷

春花今乎盛爾艷有跡可令見人之無之不樂

春去者相將挿頭等妹之云之櫻花者開去家良受也

趨出之一木櫻開之從出見每爾無人所念

妹與見之作樂花者開有跡何香一人手折將挿頭

山崎古泉 山崎小泉八望之一  
宮地真枝丈所說

年深三本之心者雖不知山崎乃井乎清見社搥

賀岩崎長門六十齡作歌長門高崗郡五社大明神官也

靈千羽經五社之何時裳々々真福座而幣者手向與

見前庭躑躅述懷

吾屋前之庭之丹管士咲毛厭共爾挿頭之人之無有者

四月五日平旦始聞霍公鳥喧作 昨四日丁  
立夏節

朝床似聞者夏借紀之嶺乃小嶺令響喧霍公鳥

四月廿六日祖母君七回忌 母君三十三回忌同會修行之時

聊述懷作

眞玉就遠近乘而古乎彌重敷爾偲今日鳴

孟蘭盆會之時聊發感傷作歌

夢爾谷不思有寸被祭六人之御魂乎可祭跡者

題鶴書

本牟智別御子命之眞事問阿藝登波斯劍古所念

爲八月十五夜月宴應 大學君命賦遊觀海亭看月之題

月毛好濱毛潔之秋去者來入參來六今毛見如

一三六

喪妻明年八月十五日夜天陰仍聊述拙懷  
照月者不照友縱意照有共令見人之在常云名國

爲九月十三夜月宴應 大學君命賦遊吞海亭看月之題  
小簾卷而吞友不足孕海門度月之影浮管

十二月四日亡妻一周忌發哀情

去年之今日乃今夜似見夢者一日一夜裳未寤來

昨日今日跡念之物尾何間似此一年乎吾者經去濫

天保九年三月賀竹蔭主人八十齡之時聊應需詠寄竹祝之題  
三園生爾殖生有伊久美竹幾世乎兼而立榮等六

四月十七日平旦始聞霍公鳥喧作丁一昨十五日  
立夏節

木閣之四月者立沼霍公鳥何不來鳴跡云管有之乎

伊豫國松山大林寺實阿上人賀七十齡之時聊應需

來世乎婆懸而念勿松山之松之常盤爾將肖身乎爲而

備後國福山領笠井治右衛門家藏一奇石號鳩化石也仍需誦  
詞于余聊賦小什贈之云

萬代爾搔撫見世常公家爾常石堅石跡化而住濫

或人慮外得鑄惠美須尊漁幸之像錢之時應需作  
如是幸多有常與津浪君之當乎指而依等六

伊都万低草之歌此草木生于北山中爾君得  
之見惠大學君仍應命云

時四有者花開鬼乎草名乃何時及常鳴下萌爾劍

旅本董 下島十八社大明神奉納

都保董探管來者日者暮去名似負有野煮吾者將宿

七月朔日述懷 去秋來臥病仍有此歌詞

露霜爾不染朽葉乃散毛不散又毛今年之秋爾相有鳴

孟蘭盆會之節聊述懷作

二年之秋片設而魂祭吾者爲友事曾不通

爲八月十五夜月宴應 大學君命詠遊鏡河看月之題  
大橋之頭乃遊者鏡河月何恰今夜爾在來

八月十五日夜月食則作

一年爾二度不相今夜之月之御面之食卷惜裳

爲九月十三夜月宴應 大學君命詠遊二見丘看月之題

玉匣二見丘爾曜月乎一心爾偲來爾家理

十二月四日忘妻三廻忌聊述懷作

家離去四吾妹者新玉乃年之三年乎雖待不來座

天保十年己亥正月元日試筆

和々氣多留肩乃可々布母從今者脫棄都倍吉春爾成二來  
寢屋外及來立喚之里長我聲者不欲々々今日之囂

三枝

百種乃花者雖有春去者先三枝乃花名之吉也

怨鸞晚啼

鸞乃聲乎將聞跡待不勝爾吾爲之烏梅母開去鬼尾

詠蘿

六倉蔓庭似者雖有蘿莖敷羽經而來將來人欲得

寄山相聞

吾妹子四待年聞者荒態乃住云山母超勝目八方

早春鸞

正月立今日乃壽詞似先立而來鳴鸞聞四吉裳

寄柳戀

春日爾張有柳母吾妹子之細眉根爾尙不及來

殘雪

瀧上之雪母不消荷白雲乃立田山者何時香咲出六

梅風

屋戶梅乃下吹風曾香細寸妹之手本爾觸而來奴禮香

山霞

氷居之谷之薄氷打解而吾山之上爾霞輕曳

待花

手束杖策毛不策毛足曳乃山櫻花開常告來者

春日登朝峯

參昇此朝峯乃皇神似手祭幣登散櫻香聞

浦戶懷古

古乎誰爾問申浦戶瀟榜入榜出留船者雖多

逍遙鏡川

思子之影哉所見跡鏡河河之瀨不落益河上

安田人某六十賀

安田川安伊座而萬代爾狹走鮎乎漁而饗座

花盛

率子等野出山入遊手六開有櫻之花爾可足

惜花

足曳之山櫻花念共不挿頭伊問爾將移香

春祝

天地爾照足而萬世爾將開作樂哉花之大王

寄鳥戀

愛八師妹之當似飛還心空在鳥西雖不有

佐川人明神清惇六十賀詠花契多春之題

長人乃挿頭乃爲乃花爾有者無春時哉不開可有

松上藤

藤花開而纏有吾兄子乎安我松木之枝母多和々爾

暮春浦

海原乃寬見乍御穗浦荷遊春方之過良久惜裳

新樹

昨日社花者落然水鳥之青葉山常早成爾來

霍公鳥

田葛引跡夏野乎不來者足曳之山霍公鳥聞益哉其

同前兼思故人聊述拙懷作

霍公鳥今來鳴曾無起與々々早起與等云之兒等波母

四月五日平旦始聞霍公鳥喧作三月二十五日立夏節

卯花之開西日從霍公鳥懸而曾待斯汝始音乎

七月二十九日松本弘蔭始入吾門之時作贈歌

今從者繼而挹見六古之心清有飛鳥井之水

荅歌

君無者誰香挹見六年深三水草生有飛鳥井之水

八月五日告病愈之由于官仍聊述懷作

道反之神之知波比可又更爾官道乎踏平之鶴

為八月十五夜月宴應 大學君命詠對月述心緒之題

天地之榮時跡望月之照足為留光者裳穴荷

同時應福岡氏需詠對月待友之題

立而居而雖待不來座今夜之月光乎一人見世常哉

為九月十三夜月宴應 大學君命詠夜弦響松月之題

梓弓爪引夜音之音清而君松葉爾月曾湯徒有

同時應福岡家之需詠翫月之題

九月之今夜之月之影浮而思人共飲口四吉裳

十月晦賀荒尾壯作翁六十齡之時應需題梅花畫

三苑生之冬木梅之早花者千代之挿頭荷先手折等香

十一月十九日宮地貞枝翁家會兼題朝霜  
夕凝之霜多置有稚草乃足結好爲而伊座朝夫

山家歲暮十二月十九日村岡直道家會兼題  
打靡春乎近見香吾門之片山海石榴將開常將爲

十二月晦夜侍宿作歌

里長之徵役課乎不許云而出而將來八方侍宿爲爾社

天保十一年庚子正月元日作歌侍宿之翌朝也

高阪之城邊靜見侍宿爲而春立今日爾相之歡也

同春至于五十歲仍聊述懷作

百歲者半許爾成去乎何吾髮之黑筋無

重作

白髮生膚毛皺去吾身乎良舊有好等誰香可言

唯人者舊有好等古爾言四人社可惜戀敷

久萬村住人某母賀七十算之時應需詠寄松祝之題  
垂乳根之母之齡似將競百久萬山之松之葉數尾

正月十九日惟宗氏家會兼題若菜

向崗爾霞霧合有率子等野上之春菜行而採中

二月十九日荊谷氏家會兼題初花

吾瀨子之屋前爾先咲作樂花今日之遊乃爲西不有哉

四月七日申時始聞霍公鳥作歌

六日丁  
立夏節

前日毛昨日毛待之霍公鳥今日者始音乎聞之乏也

爲八月十五夜月宴應 大學君命詠浦月之題

吾船乃可志振立與月清三御座浦似今夜將宿

八月十五日夜造福岡家輒語余曰頃日出依處月明之題令諸

士賦之以賞良夜請裁之即應聲作歌

塵乎谷不居御池乃鏡庭光異社月毛移有禮



九月朔日蒼鷹入惟宗宜家之時應需賀之歌  
夢爾尙見卷欲爲秀鷹乃直爾入來之家之內者藻

爲九月十三日夜月宴應 大學君命詠山月之題

初夜不去大鳥山爾啼鹿乃吾身西在者月夜飽申尾

山月

天原門度月乎此山之嶺爾近等打見鶴鳴

月前雁 九月十三日夜福岡家宿題

吾待之鴈音所聞月夜吉夜吉常誰香告而遣家武

丁野實母名松女今竝九十五焉時 東殿君聞之忝賜御詠壽

其高年焉仍此聊述歡情作

榮往千年乎松之名毛灼久花開春爾相之歡也

奉納于小筑紫 天神宮歌 願主羽田信英

古之調殘而代々遠今母響之松風之音松音彼地之名木也

十二月晦述懷作

楚取五十戶里之聲乎將鎮爾今助爾將來久我禰磨母賀

天保十二年辛丑元日試筆

初春之初若水乎結上而心母身副左夜麻理爾家利

正月九日北原敏鎌往于江戶之時贈生綱且副歌

眞幸而早還來常水下經魚毛浮出而比禮乎振乍

應松本弘蔭需題梅画

風雅有人之心常時齒成此常花跡移世將有八

柳絲隨風

妹名根之蘊久日及春風者柳絲乎然勿亂衣

二月下旬福岡君自江戶還之時沈臥連病醫藥無驗居三四日

忽逝沒也因斯悲傷作

今日々々跡日乎數乍御苑生之花爾心乎令盡也何

葬于同君隈山之夜甚雨因斯述拙懷作  
搔暮雨毛淚母零重奴手取手火乃光伊豆羅叙

二月 宮地翁死去之後哀傷作

在通魂者雖將有古言乎可問緣之無之不樂也

三月十五日朝始聞霍公鳥喧作三月十七日  
應立夏節

宇毛乃葉母未萌者不念荷山霍公鳥來喧令響

為八月十五夜月宴應 大學君命詠野亭月之題

月讀之光爾愛而標野行野守之庵爾宿為吾者

同前應 內膳君命詠松間月之題

玉敷而吾松陰似木間漏今夜來坐有月人壯士

為九月十三日夜月宴應 大學君命詠社頭月之題

住吉爾月押照而祝等之齋神言聲清度

為九月十三日夜月宴 內膳君嘗賜月前菊之題于諸人豫令

作之而大過期之後題至于予焉蓋傳 命之人失誤之者也仍

詠左件歌詞奉謝之云

久堅之月之曜夜乎菊花々爾不令落待氏氣良受也

題牡丹花圖

新玉之年者百世爾來經友益常花之色深見草

或人一日詠余曰請書關文武之歌詞賦之因作與

劔刀磨之情之不陰者我皇神之道者不惑

十二月晦聊述懷

年竟無有國毛百種爾責寄來有今日之苦者

天保十三年壬寅正月元日作

新年始之今日之千歲長有與奴鴨

同日聞鶯作

初春之初壽言乎先告而初鶯曾來喧令響

春到冰解

左和良妣乃毛要出春爾成家良志垂水々從薄水流

松上霞

手向草白木綿凌白浪之濱松之末爾霞輕曳

夜行路上詠梅

梅花薰有香鴨否乎鴨夜道乎來益妹之袖毳

二月八日累日到永德寺見花作

薪伐水汲事乎手忘而櫻之愛爾今日母作日母

春色浮水

鏡河清湍每爾此朝開霞霧相春常將云跡也

香美郡人水野常總賀六十齡之時應需詠寄山祝之題

春花秋紅葉乎美良布山足及見覽長人也誰

二月十一日過久萬村路上作

百千遍願爲常不厭鴨百隈山之山櫻花

伊藤勘右衛門壽六十算之時應需詠春祝之題

如今日藤之裏葉乎浦安似挿頭而遊立年每荷

四月四日朝始聞霍公鳥喧作三月廿七日  
丁立夏節

萬代似聞而慕常霍公鳥此龜岡爾來鳴令響

一音者今香々々跡霍公鳥穗跡々々爲乍待而不來也

惟宗宜母壽七十齡之時詠寄巖祝之題

御壽之鎮常成而床之閑爾神佐備立有此之巖者

五月十九日 家君長逝之後哀傷作歌

千年祝々廻而擎而之水玉蓋乎見者悲喪

又或時作歌

物念常寐乎不宿居者夏夜母短跡谷不所念荷

秋月入簾十五夜  
大學君御筆題

玉垂之小簀之間透照月者妹之頭刺之芽子乎見跡香

湖上翫月

十五日  
內膳君御兼題

石花海爾移有影之所堤而月母寶常成有今夜香

對月問昔

十三夜  
內膳君御兼題

蒼海原出來月荷事將問潮之八百重之昔語矣

八月十五日夜居父喪述拙懷作

清將見月光乎蓋雲雲香隱有吾淚鳴

江上月

十三夜  
大學君御兼題

侍候等浦隱居而今夜等者都多乃細江爾月夜將足

九月四日辱寵命繼先考之祿秩仍十三日夜望月色聊述拙懷  
常從異月光曾照度惠之露之玉敷有庭

喪父君之後叔父君死去之時哀傷作歌  
實十九日也  
五十殿寸而吾身傷之痛苦荷又辛鹽乎灌比日鳴

### 十二月晦述懷

取懸之肩之加々布乃如海松和々氣那賀良爾年者竟去寸

天保十四年癸卯正月元日作

算者五十三及豐津日之初日之光仰來去來

子日 正月九日

鶯之音聞香光始春之初子之小松出而引申

名所春興

伊部中世所詠

梅柳折母不折母狹穗之山上下而遊久吉裳

或人除夜夢不盡山明且令畫工圖之乃需予賀辭因歌曰

玉匣開而乎知欲利月爾日似高榮乎仰見欲等會

題芽子花畫

左牡鹿之妻問聲似競而先芽子花先曾手折四

題蔓草花畫草名未詳

花名者都裳不知然爲蟹列々雖見不足色香聞

題菊花畫

色深彌常花者誰人之世乎長秋之挿頭爾有覽

題牡丹花畫

自開散云事乎不知爲而廿日者花名耳爾在來  
朝爾異爾雖見不足自開常初春之色深見草

題夏田畫

率子等明日者標搓吾殖之小田之群苗立延爾來

三月十六日南部嚴雄往于江戶之時作贈歌

南部嚴雄子奉命赴于江門之時聊陳寸情敢投座右矣醜翁頃者有新營古義軒之志而  
匠巧未成前日忽辱若干之豐助是以宿心殆遂感謝何事如之仍而意及此云

稚室之弱薦疊敷設而宴將爲日者速歸座世

四月十日曉始聞霍公鳥作

昨九日丁  
立夏節

汝思常寢覺而聞者霍公鳥清爾名告曉之聲

柳亭嫗六十賀之時應需詠寄水祝之題

十五夜月之足面輪之面變不爲而多宜座其越水乎

題龜畫

音聞目庭雖不見常世島常敷龜者此間爾遊有

父君一周忌之時哀傷作歌

年頃之憂苦艱苦搔集而又更々爾哭泣今日鳴

霍公鳥吾崗爾來而如去年啼聲聞者淚具麻四母

題西行見不盡山圖

見人之名副言副神左振不盡之高嶺之彌高西手

題日出二見浦圖

玉匣二見浦之朝付日一心似不仰將在八

爲八月十五日夜月宴應 大學君命預詠關月之題

關守伊不留有世者紀山爾今夜之月夜飽申也其

頃者初造古義軒墻壁雖未理獨坐賞十五夜月光作歌

白玉乎敷毛不敢者稚室丹今夜來益有月讀壯士

江戶人堀練誠贈歌  
雲井如遠支土佐路乎慕可毛古伎手振乃教將聞止

奈良乃葉之名負御代之古言之義解世流真禰毗宇禮霜  
報贈歌

雲井如遠者雖在古言乎將語意隔而念哉

負氣無常且者雖知古言之義解世流事之畏也

為九月十三日夜月宴應 大學君命預詠渡月之題

辛穢之音障清爾麻久羅我乃許我乃渡乎月照度

同夜獨仰見月光作

真十鏡清月夜之不足爾內敵波不入左夜波更友

鶯梅

吉松萬齡雷畫讚

春去者先開花之枝丹居而先鳴鳥乃音之宜也  
鶯之初音常梅之始花跡何乎別而吾者將偲

諸鳥櫻

同上

朝異來啼百鳥汝尙毛花丹戀良久吾丹將益哉

霍公鳥卯花

同上

卯花之將薰時乎待勝丹吾為之事毛汝故爾社

雁芽芒

同上

鴈鳴之將來喧及常花丹耳不落置之為酢寸秋芽子

鶴稻

同上

吾門之穗田乎刈跡也此朝開鶴音寒來鳴令響

千鳥河

同上

清瀨乎馬打和多思何時然毛千鳥聞丹跡君者將來座

閏九月十三日夜月光清明聊述懷

眞十鏡清月夜乎三遍及今年者雖見尙不足家理

題鶴

且雲丹吾子羽褭鶴群之其覆羽荷霜哉降良進

天保十五年甲辰正月元日試筆

進留始若水也吾君之初國所知始爾有覽

三月九日

國君發駕是日天陰忽霽恭述卑懷

出立爲高坂山之益高國光乎不仰將有鳴

山吹

三月十四日古義軒會宿題

妹丹似屋前乃山吹來而者見與手乎者勿觸其歌方吾兄

春祝

如馬醉木榮入居而萬世古事語古事之屋丹

同日即事題

三月待霍公鳥

霍公鳥今夜者來喧宇乃花之四月立日乎明日常云爾有

同日松本弘蔭攀折山吹花且贈歌曰大方似咲晚有山吹者今

日之遊乎待而不來也即報曰

吾夫子我手折不來家婆如此今日之遊之樂有目八

弘蔭又歌曰萬葉丹勤屋外之向許曾龜崗之名者負來敷即報

萬葉丹相語羽六龜崗之常石堅石似君者往來瀨

三月廿一日朝始聞霍公鳥作

去十八日  
丁立更節

藤浪之散往見管霍公鳥汝始音耳待而家羅受也

森茂成贈不老長壽圓副歌曰長人之名乎母立核古事乎解明

目而勤在君即和歌

長人常醜津翁母所言申不老不死之樂得都禮婆

螢 四月十四日夜古義軒會

去來子等夜道者將往足曳之山下耀螢多集有

夏相聞 同上

一四〇

山畑之麥熟有刈婆加爾香緣將逢跡要而家良受也

小野直敬夢得金銀寶鏡覺後圖以乞褒詞于四方因是聊述小  
什敢題著歌

眼炎此之御寶夢耳令得之物常所念八方

五月十四日夜集會于古義軒敢具楊梅一盃客曰隱此物名爭  
賦即事即應聲作歌于時梅天雲雨頓霽月光清明也

乎理明之不見氏也夜麻母毛呂々々乃風流士集今夜之月

五月十九日父君三回忌哀傷作歌

霍公鳥汝耳本名新玉之歲之三年乎在通管

六月十五日夜集會于古義軒詠饗中物名可須底伊良也 謹名  
筆柄乎手庭取友不動而苛立物者心爾在來

武奈岐

謝物名  
植田直道贈

大寺之餓鬼常所見霜從明日者金剛力士跡所云名君

七月六日の夜吾古義軒に集ひて人々七夕の歌詠けるに  
今夜は寢をねかねつも天の川はやこぎ出むあすのいそぎに  
いつのとにか有けん春雨ふる頃家にあらざりしに細木庵

恒が訪ひ來て歸りしと聞てよみて贈れるたはれ歌

天の原すくにおほひて春雨はふりみふらずも玉ぼこの道の長道を杖つきもつかずも  
よしゑはしきやしわがせの君か近からば今二日はかり遠からば七日のうちにつけだし  
くも來まさむものとをとつひもそのさきつ日もまをしかのかたやくうらにはつく  
ものらすあらめや八重葎おほへる小屋に内に外に玉しきみてゝまたまくは思ふもの  
から桃の花くれなゐ色にほひたる面輪のうちに青柳のくはし眉根を忍みまかるは  
しきすがたのまながひにもとなかゝりておもほゆる河内をとめを眞玉手のたまたま  
しまきもゝなかにいはなさずともたゝ一目往てし見むとむらぎものすゝむ心をしづ  
めかねいたもすべなみものゝふの臣のをとは明らけき清き心をひだ人のうつすみ  
なはの一道にきはめつくして公邊につかふるものと家人をぬすまひおきてかきはぎ

山齋集

一四一



のをたちとりはきさよはひに行しあひたにめつらしくきませる君をさくら花さきも  
さかすもふくろ山木立のしゝになく鳥の聲もきかせすかへしつるかも

反歌

玉敷てまたまし君をいたづらにかへせし心すへもすへなさ  
はしきやし妹なかりせは風まじり雨のふらくに君をやらめや

八月二日古義軒につとひて人々歌よみけるに

古を語ふ小屋のあやむしろあやにたぬしきけふにもあるかも

北原敏鎌か官事によりて幡多郡柏島に行むとするとき

はしつまにたねすゑ置てかしは島子安のこの葉とりてはやこね

子安の木柏島の名産也

八月十五日の夜 大學君のおほせによりて都月といふと  
をよみて奉れる

この夜らの月よみ男こほしみしなまめき遊ふ宮女ども

九月十三日の夜のまけに濱月といふことをよめと 大

學君よりをほせられければあらかしめよみて奉れる

山越て来しくもしるく霞ふりとほつのはまは月夜さやけし

八月十四日の夜わが古義軒につとひて人々歌よみけるに

空くまなくはれわたりて月いときよし

あすの宵てらむ月夜はあらめどもこよひのめでにあに勝らじか

八月十五日雲霧いとよくはれわたりてくまなくすみのぼるへき空のけし  
きなれど病しれたる身の野山を分むことは思ひたえたればあたらこよひ  
は草の庵にたゞ獨や見つゝあかさむと思ひつゝをるほとゆくりなく横山  
直方ぬし酒さかなてうじてこよひの空をとみに見むとて出来にしとのた  
まへることこそいとうれしけれやゝありてさしのぼる月けにいとくまな  
しきてよめる

さやにてるこよひの月の影うけてあひしのまむと思ひきやきみ

直方てる月の光にさへも飛鳥井の深き心はかつ知れけり」とありければ

てる月の光もあらし

一四四

飛鳥井の底の心を君しくますは  
「秋ごとの月の夜ごろはかくしこそ來つゝをくまめ飛鳥井の水と直方のい  
へるにこたへて

飛鳥井の水草かきそけ秋さらば月を君をもまつへかりけり  
とかくするほど夜も更ければ

飛鳥井にやどりていませ月をよみ君かみまくさ我とりかはむ  
といへりければ直方宿るとも思はつきじてる月のさやけきほどに駒はや  
りてむといひつゝ立別れてしこそいと残おほく覺えしか

八月十五日の夜 登五郎君より里月の題を給はりければ  
月よみのひかりをきよみ里とにいねつく子らか聲もとゞるに

同夜 式部君より池邊月といふとよめと仰せられければ  
みなしたふ魚もこよひはかず見えていはれの池に月照にけり  
九月十三日の夜のまけに月前鹿といふとよめと同じ君よ

りおほせられければ豫めよみて奉れる

この夜らの月の光と妻こふる牡鹿とふたついつか忘れむ  
月明かなる夜笛吹けるをきゝて寺田保が「久方の月夜をき  
よみ常ゆけにきみが小笛ぞさやに聞ゆる」とよみておこせ  
たりければ

月きよみ吹なす笛もなにならむ聲しる君がきかずありせば  
松本弘蔭が酒壺を携へ來て「はしきやし君をまち酒待かね  
てあれはもち來つその待酒を」とかきて出したりければ  
待酒を行てたばらばたゞ一日うれしや今日もあすもあさても  
秋田露の莖葉をみながらすりうつしたる紙に歌かきてよ  
と吉松万齡がいへりければ

音にきゝ目には未だ見ぬ秋田露こゝに寫して見るがあやしき  
九月のはじめ潮江のほとりにて初鴈をきゝて

わたつみの潮江山の山ごよめなきてさわたるころもかりがね  
南の御館の殿の御女つ子の君の菊の繪かける扇に歌かけ  
とおほせられければ

我君の御代長秋の花なれば散るといふことをあに知らまじや  
九月十三日の夜西の御館の殿より瀉月といふをよめと  
おほせられければ

山越に月おしてれりあさかゞた夜さへいでよ玉藻かれとや

山岡衛七郎七十賀に山家祝といふをよめとありければ  
山をよみ山に住人山ながらやまずいで見よ山のときはに

九月十五日の夜古義軒につごひて歌よみしけるとき人々  
酒をたづさへ菊と紅葉を折て來にければ

思ふごち紅葉かざして菊の花浮べのむ夜のあけずもあらぬか  
野村御楯がくさぐさの色に咲たる菊ををり持來ていづれ

をかわきてしぬふとふさたをりあればもち來つ花の色々  
といへりければ

とりても見かざしても見つ哀れさはわくと難き花のいろく  
家にあらざりしほご安並雅景翁のとぶらひ來給ひしとき  
きてのちに詠みて贈れる

玉しきて待まし君をはつ紅葉あひもかさらすかへしつる鳴  
南部殿男が橋實をおこせければ

いつもくさませ逢見む賜りたるかくのこの實のときしくがと  
國 應 内膳君 初雪十景

降雪乎待歡而兒童之伊蘇婆比驟河中國原河今高智  
社 同上

降初留今日之三雪似灼然丘谷映有高鳴神社  
里 同上

希將見今日零雪之彌益丹樂伎里曾高坂之上者

一四八

河 同上

神河二遊川之川瀨光彼此丹零有波太例乃彌希將見裳

野 同上

希將見沫雪落有旦々向眞澄之鏡野原

山 同上

今旦見者見樂母不足菲生山峯白妙丹泡雪降有

嶺 同上

昨日社黃葉折牡鹿此朝開大島嶺者雪落去來

島 同上

海中丹曜立有零始留今日之三雪之眞白玉島

濱 同上

山越之風丹副而麻多斯家騰遠津濱丹波太例散飛

碕 同上

降初留雪斑丹在鹿兒碕幸伊座而在往來令見

秋山のかたかける扇に紅葉花に勝れる心の歌かきてよと

藤岡文藏こひければ

秋山そわれはといひし古言を今もきく如しぬひつるかも

おきて歎きとりて偲びてかにかくに心よそれる秋の山かも

下代曾右衛門六十賀に寄桃祝といふことをよめといふに

酒みつきゑらきさかえて桃の花したたりいませ百世ふるまで

赤堀源藏六十一賀にその子に孫に三人の夫妻そろひたれ

ばその心にてよみてよといふに

あひとよむそのとほぎの聲さへもとよりよろふ山そこの三山は

しはす廿五日御墓もりの司によさゝれければよめる

天かける御靈に近き御墓守をさくしくも人はいはすとも

おのれ年久しくふることのまねびを勤みて古のこころをくさくさの書にかきあらはしよもの人をも教へさとしはたつねのふるまひむかし様になひてことそぎがちななどを賞めさせ給ひておほやけよりこがね給はりけるを喜びてよめるときは十二月のつごもりかたなりければ  
さかゆへき春をちかみかわけのほるこの古道に金花さく  
年のはてによめる

春近み春へこひしも春こばと春まつあれぞ春にはやなれ  
天保十年あまり六とせといふとしの元日に筆とりて  
春へこひ春まち居れば春きぬと春がすみ立ち春とり鳴くも  
いと子の君いは子の君へ若菜をまゐらすとて  
雲雀あかる春野のすがた示さまく思ふ心をつみこめてけり

端山郷楠目爲作六十賀に

端山づみ神のちはへる人なればゆついはむらの動く代もあらし

四月五日始聞霍公鳥朔日丁 立夏節

不如歸きかまくほりてながためと宿のたち花うゑてけらすや  
讃岐人某か四十賀に歌こひおこせければ  
たりゆかむ神の御面と天地のともに榮えむ人をしぞ思ふ  
八月十五日夜 大學君のおほせによりて月夜興といふと  
をよみて奉る

秋の野の男女の花にほひ吾もいで見む月夜さやけみ  
同夜 登五郎君の仰せによりて島月といふを詠て奉る  
浪の上ゆ月おしてれり島つたふあはやの小舟櫂しはしとめ  
同夜 式部の君の仰によりて社頭月といふを詠て奉る  
ゆふかけて祝ひまつれる此もりにすがくしくも照る月夜鴨  
八月十五日夜きよくはれたり時の興によめる歌を奉れと  
内膳の君のおほせられければ奉れる旋頭歌

秋風のふきこきしける露の白玉照月を待喜ひてしけるしら玉

中秋月光清明恨友不來作歌

高々似君待不得而直獨悵此夜乎將明彘

九月十三日夜 大學君閑山月といふをよめとあるに

山の端のさぐらえ男君をおきてこのわか里を誰か訪はまし

同夜 式部君より關路月といふをよめと仰せられければ

ことよめは紀の關守い野干玉の夜渡る月をこよにとめてよ

同夜 登五郎君より濱月といふをよめとあるに

松かねをまきてこよひは大伴の高石の濱に月夜あきてむ

九月十三日夜松本弘蔭とひ來れりさてよめる旋頭歌かくて時の興によめる歌を奉れと内膳の君の仰せられし事の有ければこの歌を奉れるなり

月夜よし夜よしといひて來し人もよしよしるやし更ぬともよし  
明ぬともよし

九月十八日初鴈を聞て松本弘蔭に贈れる

秋山のほひにめでし雲の上よさ渡る雁の聲はきつや

同月廿四日猪野村なる杉本社に詣てし道すがら山を見て  
もみづをも青きをも見つ秋山はまを樂しきものにぞ有ける

社にちかき波川は國中の大河なり波川はいにしへにはゆる吾川の訛れるものにして風土記に見えたる神川これなり此河の水清きかゆゑに大神の御爲に神酒醸しより河の名となれるよしなどを思ひ出てよめる

大神の神酒に醸しゆよろしなへ名におふ河の瀬見ればさやけし

左川人山田平八八十賀

梓弓手挾副矢筈山高者人之壽爾在來 續紀卅六詔に復年毛

田内彦四郎七十賀

蕃息孫爾曾孫爾長人常被仰伊座今毛見如

土方喜三十六賀

栲繩之千尋繩之長人哉老樂不知釣務羅牟

一五四

濱田千束死去之後哀傷作歌千束初監幡多郡清水浦之時  
偶遊彼地交臂縱觀仍意及之  
手携清水七浦手本欲遊四念者淚之流

やとなきあたりより福壽草といふものを物にうゑて給はりてありけるか  
師走のつごもりの日ほどく咲出ぬべく見えければよめる

ことだくによと持來て万代をふよめる花の明日さかむとす  
弘化三年丙午正月元日試筆

春來ぬとけふ三枝の花ゑみにゑみて千歳をさきく經てまし

福岡氏より紅梅のさかりなるを物にうゑて給はりければ  
うま人に袖にふれ、か梅の花色さへ香さへむかしくあるらむ

福岡氏より沉丁花といふものを物にうゑて賜はれりこれなん古にいはいはゆ  
るさきくさの類なるへくかねて考へおきたることありさてよめる

咲出來しこれのさきくさまさきくて春待をりしじるしならずや

德弘文次郎母六十賀に龜の盃吸たる繪の讚

さかみつき榮ゆる今日と常世島たちてまづ來し龜ひめやなれ

病にふしたる程やことなきわたりより祝して祈ごとせし  
め給ひたりけるがやゝ怠りごゝちになれよばよめる

魂ちはふ神に享ひし身にしあればもなくとなくならざらめやも

壽晚翠亭松二母八十八算

萬代をことほぐ聲のむかしみし千代まつ蔭に出てこそ來し

三月十日餘りひとひの日しな賜はりければ喜びてよめる

思はぬにほこ取るつらの數にしもめさけ給へるそのかしこさ  
おふけなくかつは思へどやひろ矛ひろき恵みにあふが嬉しさ

そのほど人の歌よみておこせけるに應へて

しかばかり薰ふとなけど春の日の光にもれぬ花のしづ枝ぞ

賀島與右衛門六十算 島氏其性嗜茶仍歌詞及之

萬代乎目醒草之功爾氏夢爾毛禍者所見不來有覽

入交道齋八十賀應需詠寄梅祝之題

けふのごと酒に浮へて飲みてまし萬代にほへ宿のこの梅

賀高橋廣作祖母九十算之時寄詠梅祝之題

百世をば更にもいはじ萬代をかざして遊へ宿のその梅

四月十二日始聞霍公鳥作昨十一日  
丁立夏節

古爾戀管居者霍公鳥汝副來喧心四有良之

登時緋関古典仍歌詞及之

五月六日東の御館にて歌合し給へる時めされたるにほと  
よぎすを聞て詠る

霍公鳥なれもこの日をうれしみかこの殿さらず來鳴どよもす

報秦正前折蕨來贈副歌

常不知山路之奥處奧真經而念之情盖通寸哉

朝日に蘆に鶴の像かける掛物といふものに歌こひければ

かきつけける折しも新室あそびのときなりければ

朝つく日豊榮のぼる今日とかも蘆邊の鶴の常ゆけになく

閏五月十一日贈松本弘蔭歌

今日々々跡君待伊間爾石竹之惜盛之過去計類彙

矢野川龍衛門祖母七十賀配題得龍串作

龍串之久志夫流礪之石根庭常世浪毛敷而令依覽

八月十五日神祭歌 吉田左平所詠

早飲乎水爾釀成甕腹滿雙奉今日之貴也

八月十五日爲月宴應 大學君命預詠水樓觀月之題

高殿之下行河之細石母玉敷庭跡所見月夜香

同前應 式部君命預詠國月之題

螢成光神之事避之國之威德常曜月夜鴨



中秋訪松本氏賞月光作因作此歌調聊述至今愈快

時待而咲榮流屋戸在者月光母從常異所見  
中秋月光清朗至夜半少陰聊述所心實與君謀因作此歌中

恐母問爲今夜之月面荷雲勿霏霰飽及者將見  
九月十三日夜爲月宴應 大學君命預詠山館賞月之題

石根踏人之不來友月清三眞木之板戸乎今夜將閉也  
同前應 式部君命預詠水上月之題

乞須與馬抑止彼方似度者月之影哉將亂  
竹あるところに鶴あまた鳴たる

千歲祝屋戸友驗久殖竹之本副響鶴左波爾啼  
秋野のかた花鳥もあり

秋野之花盛爾成去禮婆鳥音副裳常從異啼  
九月十三日夜月光少陰聊述拙懷

何人香言舉爲兼九月之今夜月之許多霧合有

稻毛寶賀六十齡之時應需題巖生蘭之畫

巖成常磐似令見跡開從散卷芝蘭花母薰有

十二月晦日述拙懷

明立者含有烏梅毛可開先吾屋外爾來鳴鶯

弘化四年丁未正月元日試筆

從今日者千萬玉乎頭漬萬新硯海之盡世無荷

是は此度新に得し硯に向ひて初めて物せるによりてかくは詠るなり

正月八日膺初子

玉帚手庭雖不取言玉之玉之緒不絶由良久今日鳴

春鶯呼客

開梅者何處者雖有鶯之聲爲屋外乎先曾問申

和松本弘蔭副烟草贈歌

春山之霞壯士常見都禮許曾烟草副靡依計米

江口村小川縁川村助七六十賀

趨出之小川之水共長人之命共二何時香絶爲六

里蚊居田村小松千七六十賀旋頭歌

劔緒之神之知爲人之命者打堅目打之劔之廉之堅等似

二月十五日孕の花見に行て

あへぎつゝ海にきつれどなかゝにはらみまはもいでぬけふ鳴

二月十九日朝倉なる尾池氏山莊なる花を見てよめる

一昨日もきのふもめでし花はあれどけふの櫻になほしかずけり

同じ日伊野村杉本大明神の社司杉本榮齋か家にやどりて

そのつとめて庭の花を見て

みぬさとするはふりが家の朝戸出にあさめよろしく花を見るかも

三月朔日長濱なる福富氏にて

咲花のゑまひはあれと時じくに君かゑまひはかはらざりけり

同じ日常吉顯が家にて

長濱に來よする浪のなみゝに君をしもはゝなづみこめやも

同じ日大久保右京が家にて

あひ見ずて年のやそ年へしほどにいよゝますゝをちませる君

同二日の朝同じ家にて

櫻花にほへるやどに來ざりせはいかでひと夜をあかすべしやも

三月廿六日始聞霍公鳥作廿二日 立夏節

卯の花をきのふ見しより立ちて居てこひ來し心けふぞなきぬる

山家梅 武馬貞六翁七十賀題

萬世荷浮將飲常鳥梅花開有山邊爾家居爲良新

題歸鴈書 爲植木直清所詠

情無鳥似其有來春花之將薰山乎置而可行哉

題月前霍公鳥畫 同前

一六二

霍公鳥無流國庭如此許曜有月夜裳不樂有猿

八月十一日福岡孝茂主の京にのほり給ふ時小鯛に副てま  
ゐらせたる歌

久堅之王都之天平仰管領巾振出之鱒之狹物叙

湖橋立月

大學様  
八月十五夜御兼題

此間來而今夜月夜不見將有哉瀨田之長橋不絶限者

野徑月

登五耶様  
同前

白檀鯨野乎來者蹉跎埼暮霧霽而月夜潔之

八月十日あまり五日の夜松本弘蔭がもとにて

去年も見つ今來む年も秋の夜のこよひの月夜かくしあひ見む

こは南の御館の殿より十五日夜の實興の歌召れければ奉れるなり  
同じ夜亥のときはかりより月はえければ

思共雖見不厭月面之四惠夜恠之食卷念者

菊園月夕

九月十三夜  
大東御館御兼題

ひる見れど見あかぬ園の菊の花よるさへ見よと月はてるらし

江月

同前  
西御館御兼題

なまりをる吾すら今宵いでよきつ難波の小江にてる月を見て

九月十日あまり三日の夜笛ふき遊びけるに更行まよにや  
よくもれる空の清くはれわたれりさてよめる

ふきなすや手馴の笛の聲のむた澄める月夜のあなおもしろき  
某の殿より歌奉れと仰せられければよみて奉捧る

世間に生としいける物みれば産日の神のみむすびとしれ  
情進に言あけするは言あげせぬ國とも知らぬおぞのはかせぞ

九月廿三日御即位ましますよし奉拜承

草も木も皆とやめて久堅のあめの御空をあふぐけふかも

九月廿七日大津村信義明神祭日參拜一柳健作家にやどる  
そのつとめて

大神のしきます山にやとりしてたゞさす朝日みればたふとし

同廿八日小籠村北岡儀之助を訪ふ十月朔日朝かへるその  
ほご酒折山の紅葉を見て詠める山はその家にまし向へり

八鹽折之酒折山之初黄葉觀管飲間似日數去來

儀之助二郎歳九なるが賢しき性にて書よく讀をきよて

種居之其時自之思兼神哉蓋九御靈賜劔

かへりのほど布師田村なる高結神社を拜て

こもまくら高御むすびの神社あふげばいよゝ高くたふとし

同村葛木男女神社を拜む

みつがきの久しきときゆ二ならびしつまりますか男咩の大神

即位は九月廿三日也故有て國君は十月七日に御例の御遙

拜あり依之御城内諸番所麻上下着也

吾君の御心のまに久方のみやこの空をあふくもろびと

十月十日ばかり守の殿國めぐりせさせ給ふほど小籠のさなる北岡ぬし

の二郎のとし九ばかりなるがさとふかくておほくのふみどもよみおほ

えたることをきこしめしてかたしけなくも道のかたへにめして物賜はれ

るよしきよて

今ははや空にぞ高く響きぬるなどかたなりの聲ときよけむ

川原塚芳枝か母の七十賀によみておくれる六首の歌

人のおやのいのちさきくと皇神に万代かねてぬさは手向む

人のおやのさかみつきせすけふの如万代かねてさかえまさなむ

人のおやのかさしのためと手折きつ万代かねてさかむさくらを

人のおやのいまもきく如ほとよぎす万代かねてかれずなかなむ

人のおやのゑめるおもわとつきの面万代かねておもかくりせし